

「第11回市民参加懇談会」 第1部 議事録

日 時 : 平成17年10月5日(水) 13:30～17:00

会 場 : 静岡県御前崎市 新野公民館

事務局 それでは、定刻となりましたので、市民参加懇談会 in 御前崎を開会させていただきます。

まず初めに、ご意見を頂戴する方々をご紹介します。

本日は10名の方々にお越しいただいております。

御前崎市からお越しの池田文明さん。(拍手)

御前崎市からお越しの大澤幸子さん。(拍手)

御前崎市からお越しの大澤尚登さん。(拍手)

浜岡商工会副会長、片山満洲雄さん。(拍手)

御前崎市からお越しの鈴木俊夫さん。(拍手)

御前崎市からお越しの藤原照巳さん。(拍手)

夢咲農業協同組合浜岡地区担当理事、増田勲さん。(拍手)

御前崎漁業協同組合長、増田勇一さん。(拍手)

御前崎市からお越しの柳沢静雄さん。(拍手)

御前崎町商工会女性部長、山下マサ子さん。(拍手)

続きまして、原子力委員会市民参加懇談会のコアメンバーを紹介します。

本日、司会・進行をしていただく科学ジャーナリスト、中村浩美さん。(拍手)

消費生活アドバイザー、碧海酉癸さん。(拍手)

エネルギージャーナリスト、新井光雄さん。(拍手)

生活情報評論家、井上チイ子さん。(拍手)

社会評論家、小沢遼子さん。(拍手)

九州大学大学院教授、吉岡斉さん。(拍手)

市民参加懇談会座長である木元教子さん。(拍手)

本日は会場の方に原子力委員会委員が来ておりますので、紹介します。

原子力委員会、近藤委員長。(拍手)

齋藤委員長代理。(拍手)

町委員。(拍手)

前田委員。（拍手）

それでは、これより先は木元座長、よろしくお願いいたします。

木元座長 木元でございます。本日はお忙しい中、こんなにたくさんお集まりいただきまして本当にありがとうございました。先月の２８日を締め切りとして、ご参加の申し込みをいただきました。２８日までの間にきちんとお申し込みいただきまして今日ご参加いただき、本当にありがとうございました。

市民参加懇談会のことは、皆様のこの袋の中の資料の３つ目のホチキスでとめてあります。「市民参加懇談会の活動について」という１０枚ばかり綴じたのがありますが、その中に全部書いてございますので、改めて申し上げることもないんですが、平成１３年からこの会は立ち上げております。いろいろ議論の末に、こういった市民参加懇談会の第１回は柏崎の刈羽村で行いました。その経緯なども若干ご説明させていただきたいと思っておりますのは、今回の開催と大変よく似ております。柏崎刈羽村で住民投票が行われまして、あのときはプルサーマルを導入する、しないということが主たるテーマになっておりました。結果は、少しの差で否定をされました。ということで、賛成した派と反対した派と両方からお手紙を頂戴いたしまして、私の方がきちっと受けとめました。

お手紙の内容はどういうことかといいますと、村が議論で二分されているように見えるけれども、かみ合わないところもあるが、かみ合うところもあると。だけど、国や事業者は説明はするが村民の声をしっかり聴く機能を持っていない。ですから、そういう声を聞く機能を持ってくれないかと、そういうご提案が柏崎刈羽村からあったわけです。それをもとにして、では、原子力委員会にそういう窓口をつくらう。市民の声を伺う、しかし、それは政策の是非論ではなくて、政策をつくるときに、そのプロセスに反映するような市民の声を私どもは伺う義務があるのではないかと、そういうことでこの市民参加懇談会が発足したと、その経緯がここに若干書いてございます。原子力策定のプロセスにおける市民参加の拡大を図り、市民との信頼関係を確立するための方策を検討するために、市民参加懇談会を設置ということです。

ですから、例えば原子力の是非論であるとか、あるいは原子力発電所は地震がきても大丈夫なのか、大丈夫じゃないのか。否定の学者もいれば肯定の学者もいる。しかし、そういうテーマの討議をしたり、是非論を戦わせるのが市民参加懇談会の仕事ではありません。例えば、そういうことの要望があるのであれば、それは独自に勉強会を開いていただいて、私どもがそこで傍聴するという形の方が望ましいわけで、刈羽のときもそうでしたけれど

も、ブルサーマルの是非論はやりませんでした。それよりも、ここはそういうことを問うために住民投票を行った村である。村が二分されているのか。それから、自分たちが言いたいことが届いていない。それらの声を吸収しようということで、「日本のエネルギーはどうあったらいいのか」とか、「市民の暮らしはどうあったらいいのか」、「その中に原子力はどう介在するのか」、そういう大所高所の論議から展開してまいりました。それが発端でずっと続きまして、今日で11回目になるわけです。

先ほどご紹介がありましたが、今日は私を含め7人ここに座っているコアメンバーがおります。メンバーリストも出ておりますが、開催にあたってはコアメンバー会議を何回も開きます。刈羽村からそういうご提示があったときも私どもはしっかり受けとめて、いつ、どこで、時間も決め、どんなテーマで、どういう方がパネリストになってということまでを全部討議し合いながらこの会を開催することにしております。

ですから、今回がそれに似ているというのは、新聞に出ましたけれども、静岡新聞の9月7日、これは夕刊でしょうか、原子力委員会が御前崎で懇談会を開くということを記事として書いてくださいました。うれしかったです。その中で、きちんとこの市民参加懇談会の意義とか、経緯を書いてくださったのです。今日これは申し上げてもいいということでお話いたしますが、「浜岡原発を語るかい」の東井怜さんに、ご尽力いただきました。

実はこの会を開催するに関して、ことしの2月ごろから、東井さんからいろいろなご連絡をいただいたり、お手紙をいただいたりしました。市民参加懇談会を御前崎で開いてもらえないだろうかということだったんです。私どもも快く受けとめました。ただし、そのときの最初のご提示にあったのは、今は地震のことでみんな悩んでいると。ですから、地震には大丈夫だという学者と、これは危ないんだという学者と、双方を呼んでそれぞれ考えていることを述べていただいて、それを市民が参加をして意見を交換する、質問をする、学者の方に答えてもらうということの集会にしたいと、こういうことでしたので、それならばご自分たちがご計画なさってやってくださった方がいいと申し上げました。

市民参加懇談会はそういう会ではなくて、例えば賛成、反対とあるならば、賛成の情報はどこから得ているのか、反対の情報はどこから得ているのか、それは知りたい情報だったのか、それとも単にそこにあった情報なのか、それとも自分たちが望んでとった情報なのか、それによって自分はどうなったのか、そういう情報のあり方を討論するのが市民参加懇談会だと思うのでと申し上げ、東井さんも快くその方向で、それでやりましょうということでここまで来しました。

ですから、この静岡新聞に書いてありますのは、これは東井さんがおっしゃった言葉として書いてあったのですが、「浜岡原発は5号機増設時のヒアリングしか市民の意見を国に伝える機会を設けられていなかった」ということで、これは重く受けとめました。東井さんのお言葉の中で私どもも本当に胸にこたえたのは、御前崎の人はどこに訴えていいかわからない。訴える場所がない。言えないでいると。国も事業者もなかなか聞いてくれない。だから、「御前崎の方たちは本当にかわいそうなのだ」というご意見でした。そこでコアメンバーが延べ3回、この御前崎をどうしようかということで論議いたしました。最初は静岡市でやりたいということを申し上げたんですが、御前崎の人の声を聞いてほしいという東井さんのご要望でしたし、私たちも、そういう状況ならば当然だろうなと、という思いがありましたし、ぜひ伺いたいということで、今日こちらに伺わせていただきました。ご案内を差し上げたときにご発言者は御前崎市の方々に限らせていただきますとしたのは、そういう前提があったわけです。それで、御前崎の方々を主役として、このように参加していただきました。私どもも今日はしっかりと耳を傾けてさせていただきます。

今日いただいたご意見は、原子力委員会にご報告をいたします。そして、それが原子力の政策策定のプロセスに、こういう意見があるということで反映させていただくことをお約束させていただきます。

やはり情報の送り手とか、受け手とか、いろいろな立場があると思いますので、例えば地震のこととかプルサーマルのこととかの論議をしたいということはおありになると思うけれども、その情報はどうだったのか、「情報のあり方」を今日はぜひ論じていただきたいと思います。正確に、幅広く情報が来て、それがちゃんと納得できる、わかりやすいものであって、それで私はこういう結論に達したとか、これは信頼する人から来た情報なので信じているとか、いろいろなケースがあると思いますので、「情報のあり方」を中心に今日は論議を展開させていただこうと思っております。ですから、新聞に、「この懇談会は耐震性の疑問など市民の不安を直接国に問える初めての機会になる」と、こういうふうな東井さんの言葉として紹介されておりますけれども、これは違います。もしかして、そういうふうな期待がどこかにあったのかもしれませんが、そういうことではないということだけはきちんと訂正させていただきます。

ということで、今日の市民参加懇談会を進めさせていただきますが、先ほど申し上げましたように、今日は11回目です。タイトルも先ほど申し上げたように「知りたい情報は届いていますか」ということで、原子力に関する情報のあり方を論じていただくことにい

たします。

今日は御前崎市にお住まいの方々が主役です。この方々のご発言をたくさん賜りたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

今日はセキュリティの方の関係で、警察の方からもいろいろお言葉がありまして、ちょっとチェックが厳しかったと思いますが、28日の締め切り以降の方にお見えいただいても入れなかったり、それから参加証を持っていっても何か照合しなきゃいけなかったりと大変お手をわずらわせたと思いますけれども、それはセキュリティ上の関係でさせていただきましたので、改めてご迷惑がかかりましたことをおわび申し上げます。

これから会を展開いたしますが、実は9月26日に福岡市で同じようなテーマで、同じような市民参加懇談会を開かせていただきました。そのときに、本当にこういう集会というのは成熟したなということをしみじみ感じました。実は、ここ二、三年それを痛感しているんですけれども、賛成であれ、反対であれ、原子力行政をどう見るか、自分はこういう意見を持っているかという視点では異なってもテーブルは一つ、テーマもです。その中で、相手のことも理解し、また自分のことも理解してほしいということで、大変成熟した大人のご意見が展開されていくと思います。福岡でも肅々と、ちょっと楽しく、ざっくばらんにご意見を交換させていただいて、いい会になったなと思っておりますので、今日もそれに勝るいいご意見、大人のご意見を伺わせていただきたいと思いますので、くれぐれもよろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

それでは、私から中村委員にバトンタッチいたします。よろしくお願いいたします。

中村コーディネーター 本日の司会・進行を担当いたします、コアメンバーの1人です中村浩美です。よろしくお願いいたします。

ここからは座ったままで進行させていただきますし、発言者の皆さんもお座りになったままで結構です。

今日の構成ですけれども、1部、2部に分かれておりまして、プログラムのとおりです。第1部の方は御前崎各地からおいでいただきました10人の皆様にご発言をいただきます。第2部の方では、会場にお集まりいただいた1部をずっと聞いていただくお客様が主役ということですから、挙手をしていただければ私がご指名をしてご発言をいただくと、そういう構成でまいりたいと思います。

このコアメンバーというのが私を含めて今日6人、座長を入れると7人になるんですが、

何か皆さんと対峙するような感じで座っておりますが、コアメンバーは議論をしに来たわけではありません。コアメンバーの役割というのは、立地なら立地、あるいは消費地なら消費地の市民の皆さんの声をできるだけたくさん伺って、それを原子力委員会に上げて、国の政策決定のプロセスに何とか市民の声を届けようと、そういう役割が私たちコアメンバーの役割です。ですから、議論をするわけではありませんが、ご発言の内容、論旨をより深く理解するために質問をさせていただいたり、懇談をさせていただくと、そういう役割で今日はコアメンバーが出席をしております。

それでは、早速第１部を始めさせていただきますけれども、便宜上今日は五十音順に１０名お並びいただきましたが、申しわけないんですが、五十音順に発言順もさせていただきます。池田さんは小学生のときから、きっと何でも１番か２番に当てられていただろうなと思いますが、ご勘弁ください。

お一人のご発言の時間は七、八分を目処にお願いいたします。第１部は一応１００分を予定しておりますので、七、八分でお話ししていただいて、若干の懇談を入れて、順調にいくと１００分で終わるという計算ですので、ひとつよろしくをお願いします。

それでは、トップバッターです。池田文明さん、よろしくお願いします。

池田氏 池田です。よろしくお願いします。

ただいまご紹介されました池田と申します。私は御前崎市白羽に住んでおりまして、仕事は御前崎市門屋の会社でございます。

私はこの６月なんですけれども、市役所の原子力対策室の方から、原発の関係なんだけれども、オピニオンリーダーというのになってくれないかというようなお話がありまして、一応来年の３月までということで、そのオピニオンリーダーというのを引き受けさせていただきます。

このオピニオンリーダーというのは、全国にある原発のある町の市民で構成されておりまして、現在３０名ぐらいですね。目的はいろいろな研修会を通じまして、原発の最新情報を勉強しまして、それを地域の知りたい方とか、聞きたい方があったら伝えるとか、あるいは原発のある町を視察したり、あるいはその人たちと交流会を通して、安全性とか、あるいは地域振興での取り組みとか、その辺のことがどういうふうになっているのか、その辺のことを理解するというのが目的でございます。

現にこの７月には、東京でそういう会がありまして、そういう研修会に参加したわけなんですけれども、そのときに初めて専門の先生のお話を聞いたり、あるいはそこに来ている人

たちとの意見交換会なんかをやってきました。そういうことがあったものですから、今回もこういう件でお話があって引き受けさせてもらいました。ただ、正直なところ、余り原発に関して強い関心を持っていたわけではございませんので、そういう一市民として意見を述べさせていただきたいと思います。

今回のテーマで、「知りたい情報は届いていますか」ということですが、その前に原発のある町の市民として感じていることを先にお話しさせていただきたいと思います。

私がたしか小学校５年か６年ごろだったと思うんですけれども、友達が原子力発電所ができる町とか港が発展するようになるんだよなんてことを言ったのをちょっと記憶に残っているんですけれども、そのときは当然子供でしたので、そんな社会情勢にも関心があったわけでもないし、何とも思わなかったわけですが、現実この昭和５０年ですか、５１年から原発が稼働して、ちょうど約３０年ぐらい経過するわけですが、交付金を利用して文化とか、あるいは福祉、あるいは産業育成なんかのそういう施設とか、あるいは道路の整備がされまして、ここに住む市民としては本当にありがたいなと思っております。また、雇用の面も働くところがふえて、特に私は旧御前崎の出身ですが、御前崎は余り企業もなく、働くところも少ないわけですが、原発ができた関係で私も随分原発の関係に行っている人も知っておりますし、実は私の父親も船乗りだったんですけれども、５４で退職しまして、その後原発の関係の会社に七、八年ほどお世話になりましたので、そういうこともありがたいなと思っております。

電気料なんかも家庭もそうだと思いますけれども、会社も還付金なんかがあったりして、他の地域に比べれば恵まれているなと思いますし、あと私も会社に勤めていますので、会社側から見ますと、一般の方は知らないかもしれませんが、企業が建物を建てたり、機械の設備をしたりして、それで申請をして、完成の実施報告日までに５人以上の雇用をふやした場合には、今は３人以上となっておりますけれども、補助金が出るわけですね。ちょうど私どもの会社も平成１２年です。工場を建てまして、そのときちょうど私は担当の窓口だったものですから、その手続をずっと自分で進めていたわけですが、ここで貰った金額は言えませんが、これだけ貰えるのかというような金額をいただきました。企業としてそれだけの利益を得るのはなかなか厳しいものですから、本当にそのときは助かりました。そんなことで、御前崎に原発がある市に住んでいまして、いろいろな恩恵を受けているなと感じております。ただ、原子力といいますと、何かあった場合、最悪の場合は地域が崩壊してしまうとか、あるいはここに住んでいる市民の方の命が失われ

てしまうかということがありますので、本当にその辺は十分注意を払ってやっていただきたいというのは思っております。

今回のテーマで、「知りたい情報は届いていますか」ということなんですけれども、私なりに思っていることは、この何年か前からいろいろ企業の不祥事がクローズアップされてきて、CSRとかコンプライアンスということで、なかなか厳しくなっていて、皆様もおわかりと思うんですけれども、そんなことなものですから、企業としてはできるだけ情報を開示せざるを得なくなっていて、いろいろな情報が入りやすくなっているなとは思っております。

あと、当然インターネットの活用で知りたい情報はとれますので、今回も話題になっているプルサーマルの件も、静岡新聞の1面にカラーで出ておりました。ただ、原発のことといいますと、なかなか理解しづらいというのを正直感じております。なものですから、できるだけ皆さんにわかりやすく、理解しやすいように説明をしていただきたいなとは思っております。

情報の発信としましては、地区なんかはよく回覧板といいまして、原発の関係の情報誌も回ってきますし、今度旧の御前崎の方もケーブルテレビが入りましたので、そういうケーブルテレビを利用したりとか、あとは各地区での説明会、当然今もなさっていると思いますけれども、そういうことを今後も続けていただけたらなと思っております。

あと、御前崎といいますと当然原発と今後も共存共栄していかなければなりませんので、将来のあるこの地域を背負っていく小学生や中学生とか、そういう人たちにも何か理解していただくような場を企画していただけたらなと思っております。

ただ、一番気になることは、皆さんもそうだと思いますけれども、東海沖地震が起きた場合どうなんだということで、これは必ず起きますので、この辺ともう1点はニューヨークの9・11テロがありましたけれども、あんなことはあってはならないことなんですけれども、仮にあってはならないけれども、原発に飛行機が墜落しちゃったら一体どうなんだろうなという、そういうことは本当に心配しております。

あとちょっとありますけれども、この辺で終わらせていただきます。

ありがとうございました。

中村コーディネーター ありがとうございました。

では、続いて大澤幸子さん、お願いします。

大澤（幸）氏 私は御前崎市の御前崎地区に住んでおります主婦の大澤幸子です。何も



知識のない私ですけれども、よろしくお願い申し上げます。

幾つか今、池田さんの方からもいい点も道路ができたとかということで、雇用の問題とかでお話でしたが、私は私なりの少し意見を述べさせていただきたく思っております。

中部電力原子力発電所をつくることになって、説明会や補償問題等、いろいろな段階の経過がありました。その当時の私は家業に専念しておりましたので、耳を傾けている時間はありませんでした。1、2号機の見学会に参加する機会がありましたので、参加してみました。見学用の帽子とか服、手袋、靴等を身につけ、施設の中を丁寧に説明してくださり、使用済燃料貯蔵タンク等を見学した後、検査機器を通過して安全性を確認して出た思い出があります。放射性物質を外に出さないように、幾重にも壁で閉じ込めていることを知りました。その後、婦人会活動の仲間とともに、神奈川県横須賀市にあります東芝のプルサーマル燃料棒用のベルト施設を見学させていただきました。難しい単語は理解するどころか忘れてしまいましたけれども、不安のない丁寧な説明や施設にすぐ隣接する民家もあるところということで安心させられました。

また、商工会女性部でも原子力について講演会を開催させていただきました。講師は薬学博士の久保寺昭子先生でした。日常生活における事例等を挙げまして、わかりやすいお話をしてくださり、私自身も心配はしなくてもいいなという感じを受けました。空気中や人間の体の中にも放射線はあるということでした。

私のプライバシーにもかかわりますが、その後私の主人が喉頭がんになり、3カ月の入院生活を送りました。声帯を取らなければならないかもしれない状態でした。放射線治療に入り、毎日注射とのどのところにマジックで印をして放射線をかける。本当にやり切れない状態でした。3週間かけて直らなかつたら声帯を取るということで、私もとても心配して毎日静岡へ通いました。このまま思うように話ができなくなり、同じ食べ物も食べられなくなると思うと、とても悲しかったです。最高限界の30回をもう5回ふやして、筆談の苦しい治療でした。最後の1回は患者と医師の間で負けてくれ、じゃ、負けてやるというような治療の取引をするほど食事がのどを通らない状態でした。

本人は病気を告知されていないので、退院したら遊魚船をやるつもりで体力づくりのために放射線治療に行くときには、6階から1階まで階段を歩いて降り、終わると体が疲れて歩けないので、エレベーターを使用しましたが、本人なりに努力をしてまいりました。筆談でしたので、おかゆは死ぬときに食べるものだとは本人は嫌がっておりました。丸飲み

のできる栄養のあるものということで、本人の好物のべっこう寿司、うなぎの蒲焼を毎日静岡の県立病院へ届けました。家業と義母、92歳の母のいる生活でしたので、毎日静岡の送り迎え、娘がお産の途中の入院と重なりまして、2つの病院を駆け回りました。声帯を取らないで放射線治療の結果がよくて、13年過ぎた今は会話ができる生活です。放射線情報を積極的に自分が関心を持って、情報をとろうとした講演会や見学会はよかったなと思っております。

東京電力の検査、点検の不正の問題がありましたが、中部電力には事故のないように願っております。御前崎広報や原子力だよりで定期点検の様子を知らせてくれます。会合等でも説明されました。5号機も見学させていただきました。地震が起きても揺れの影響の少ない岩盤の上に普通の建物の何倍も丈夫な設計になっていて、自動的に原子炉がとまる仕組みだと聞いております。原子力発電所の地域の担当職員と信頼関係、コミュニケーションが何ととっても原子力発電の安全性の説明が安心感につながるのではないのでしょうか。当たり前の電気、ありがたい電気の生活はできません。いつもいつも思うことは、危ないというところで私たちのために働いていてくださる人たちがおるということを思っております。今、見学してみたいと思っているところは、廃棄物処理施設の見学をしてみたいと思っています。難しいことはわかりませんので、専門家を信頼するしかありません。平凡な毎日ですので、まとまった意見になりませんが、以上でございます。

ご清聴ありがとうございました。

中村コーディネーター ありがとうございます。大澤さん、実体験を交えてのお話、ありがとうございました。

続いて、同じ大澤さんですけれども、今度は尚登さん、お願いします。

大澤（尚）氏 御前崎市御前崎の大澤といいます。職業は設計士です。

この話の前に、私の方で皆さんに私の発言をより理解していただけるように、レジュメと資料をつくってきたんですけれども、手違いで今皆さんのお手元にはありません。それで、事務局の方でこの1部と2部の休憩時間に受付の方に置いておくということですから、大変申しわけないんですが、また休憩時間におとりいただきたいと思います。

皆さんの手元には資料がないんですけれども、それも交えまして話をさせていただきます。

まず最初に、原子力委員会がこのようにして原発立地の地元の住民の声を聞く機会を設けていただいたことに感謝申し上げます。今日のテーマとして、「知りたい情報は届いて

いますか」ということですが、私が最も知りたいことは、浜岡原発は東海地震に耐えられるかということです。現在は国としても原発においては絶対安全はないと言っているにもかかわらず、中部電力の説明は100%安全を強調しています。

この資料の中にグラフがあります。小さくて皆さんのところからは見えないので、申しわけないんですが、全国の原発が地震によってどれくらいの揺れに襲われるかを比較したものです。折れ線グラフがそれぞれの原発の耐震設計で想定されている揺れの大きさ、それから棒グラフがそれぞれのサイトに予想される揺れをあらわしています。予想の方は文部科学省がこの春発表した全国を概観した地震動予測地図をもとに作成されたもので、予測地図はインターネットでだれでも見るができます。浜岡原発は全国一強く設計されておりますけれども、その設計値は文部科学省によって想定された揺れの大きさに到底及ばないものであることもはっきりしてしまいました。ですが、このような情報は同じ政府の試算であるにもかかわらず、私たち地元には知らされていません。

浜岡原発が日本一大きな揺れに襲われる理由ですけれども、それも政府の中央防災会議が作成したもので、想定東海地震の震源域、その中の中央に浜岡原発がある。浜岡原発の真下が震源になる。しかもその深さは15キロ前後、こういうところは全国でもここだけです。私たちの記憶の中には、いまだに阪神大震災の未曾有の惨事が刻まれています。そして、東海地震はその阪神大震災の10倍以上のエネルギーを有すると政府が発表しています。ということは、この私たちの住んでいる地域も壊滅的な打撃をこうむる可能性が大であります。その中で、中部電力が言うように、果たして浜岡原発だけが無傷でいられるのかどうか、大変不安です。今年の8月には、東北電力女川原子力発電所で地震波の一部とはいえ、ほとんど起こり得ないとされる設計用限界地震の想定を上回る揺れを記録したとの報道もあります。そして、まだ記憶に新しいインドネシアのスマトラ沖の地震による津波被害、たくさんの犠牲者を出しましたが、津波とはあんなにも凄まじいものかと身の凍る思いをしました。そして、スマトラ沖の地震の後、地元では浜岡原発に対して津波による心配までふえました。

御前崎市や静岡県は国が安全だと言っている以上、そういう認識をせざるを得ないという立場をとっていて、住民の不安を解消するということには極めて消極的であります。したがって、「知りたい情報は届いていますか」ということについては、本当に知りたい情報は届いていないというのが私の意見です。御前崎市や静岡県は住民の不安を解消することに極めて消極的であるという事実を原子力委員会の皆さんに知っていただいた上で3つ

ほどお願いがあります。私が思うに、日本列島は確実に地震活動期に入っています。そして、東海地震の外堀が埋められつつあるような感じがします。本当にいつやって来てもおかしくないでしょう。

そこで、原子力委員会にお願いがあります。知りたい情報としては、阪神大震災の10倍以上のエネルギーを有するという東海地震のシミュレーションをやってみていただきたいのです。これは、浜岡原発がもつかもたないかを議論するのではなく、テロ対策と同様に事故が起こった場合の危機管理として必ずやるべきことだと思いますが、例えば危険度を1から5段階とか10段階に分けて、それぞれの危険度に応じたマニュアルもつくらなければなりません。その中では、最悪のシナリオも当然想定しなければならず、浜岡原発がいわゆるメルトダウンを起こした場合にどうするかということも入ってくるわけです。原発サイトの外は大震災です。そこで一体どうやって震災被害者を救助するのか、住民をどのような形で避難させるのか、そのような危機管理としてのシナリオをぜひ作成してもらいたいと思います。

2つ目として、安全協定についてです。

中部電力が静岡県や御前崎市と結んでいる安全協定の中に、事前了解の項目がありません。これは国内の17の原発の中で浜岡原発だけです。ですから、原子力委員会の方から中部電力、静岡県、御前崎市、そして周辺自治体に対して一日も早く原子力安全協定の中に事前了解項目を入れるように強力に指導していただきたいと思います。

そして、3つ目としてプルサーマル計画ですけれども、今は原発を浜岡へ誘致した時と状況はまるで違っています。プラスよりも受け入れたことによるマイナスの値の方が年々高まってきています。したがって、プルサーマル計画については、まず1つ目として安全性が客観的に確保されるまで、そして2つ目としては東海地震をやり過ごしてから、この2つをクリアして改めて協議のテーブルに乗せていただくようお願いしまして、私の発言を終わりたいと思います。

ありがとうございました。（拍手）

中村コーディネーター ありがとうございました。大澤尚登さんでした。

続いて、片山さん、お願いします。

片山氏 浜岡商工会副会長の片山満洲雄でございます。職業は建築業でございます。

今日はテーマを2ついただきましたものですから、そのテーマに沿って少し読ませていただきますので、よろしくお願いします。

中部電力が浜岡へ原発を申し入れしたのが昭和42年、今から38年前、当時の町の財政指数は0.35と極めて低く、企業誘致を願った矢先でありました。しかし、町民は原子力発電所とはどんなものか、知る人は少なかった時代で、初めから危険なものを内蔵しているということがわかっていて、絶対に害を出さない施設として建設された。また、時代の最先端に行くものであり、国の監督下であり、信頼できるということでもありました。申し入れ内容は50万キロワット級の50万坪、当時浜岡町は原発を誘致したのではなく、地域の振興、社会福祉の向上を願い、国のエネルギー政策に理解を示す中で、申し入れに対する町の基本方針を住民の前に明確に示して、民意の集約に努めたものでありました。当時の基本方針は3点ありました。

1つは、賛否は町民自ら決める。浜岡原発問題が表面化したのは、そのときから反対運動をする人たちが浜岡へやって来るようになり、その一部の人たちがこの地域でも原発反対の運動を繰り広げ、また町は浜岡原発の問題は彼らの知恵をかりなくとも、我々地域の人たちで勉強し、真剣に検討していこうということでありました。

2つ目は、地域開発を促進させる。原発建設を受け入れるのであれば、当然のことながらその建設によって住民が長い間待ち望んでいた地域の開発振興の引き金にしていこうというものでありました。

3つ目は、隣地と友好、共存共栄を図る。原発によって、将来地域開発が促進されたとしても、浜岡町だけがよくなればよいということではなく、隣接する町を含む地域一帯が活性化するということがあった。

以上のことが当時の基本方針でありました。

そこで、我々商工関係者としてメリットとしての経済効果は何かと考えますと、昭和40年に電源三法が制定され、50年度から53年度までに16億9,800万円の三法交付金が得られ、49年には当町一般会計決算額は29億9,000万円となり、この予算規模は1町の枠を超え、都市並みの予算でありました。この使い道は道路、水道、町民会館、あらゆる施設ができ、合わせて49件の施設が整備されました。ちなみに、電源三法の交付金は1、2号機で16億9,800万円、3号機で46億円、4号機で55億円、5号機で72億4,500万円となっています。

商工会ももちろん例外ではありませんでした。第1に、町からの補助金も増大し、昭和47年の補助金は120万円、それが平成3年には330万円にはね上がっています。これが商工振興活性化に大きく寄与されました。また、54年度には商工振興資金利子補給

制度が生まれ、平成３年度には利子制度により補助金が７００万円、街路灯増設には１，６００万円の補助というように商工会事業も活発な展開を見せるようになりました。昭和４１年度の商工会人数も２４６店、５７年度には３７６店と増加し、特に飲食店、民宿がふえ、これも原発景気であり、平成３年度にはこの浜岡へ７，３００人余りの労働者が出入りするようになり、昼間の人口は実に４割近い人口増となりました。この人口増を当て込んで３１件の飲食店や民宿が５５年度には何と１０３件、平成１１年度には２９６件に膨れ上がり、さらに建設業の大手は町内に寮を建設し、暮らし始め、飲食店ばかりではなく、あらゆる商店の販売量も上昇になりました。

原発効果はまだありました。それは雇用拡大である。近隣の町の若者を問わず、多くの人が浜岡で働くようになりました。こうして、浜岡町民度は着実に向上を続けてきた。町は平成１３年度事業として３５億の予算を組み、ＣＡＴＶの構築を進め、各家庭に無料で端末を配布し、通信費無料として有益情報を提供、ファクシミリや有線電話を合体した通信システムは情報提供だけではなく地元商工業者に大きく貢献しています。商工会でも地域小規模事業者情報ネットワーク事業を設立し、ＣＡＴＶのインターネット活用で商工会ホームページを開き、そこにいながらにして商品の取引を発注を行えるようになりました。

これからはどうしたらいいかということです。

平成８年度、浜岡町は１号機を誘致以来、町内では町議会主催の町民プレス懇談会が開催され、５号機受け入れに動き出しましたが、旧ソ連のチェルノブイリ原発の事故、阪神大震災の事故等により、反原発の動きが強まり、平成１１年１２月に浜岡原発の火災と１号機の手動停止、高速炉「もんじゅ」の事故等が重なり、原発に対する不安感が高まり、５号機は棚上げされた状態となってしまいました。商工会としても、４号機が完成し、労働者が減って、民宿等に空き部屋が多く出始め、また商店街も客足が遠のき、売り上げも減少してきました。

そこで、早期建設ということで商工会も町への要望書の提出を協議し、賛成多数で決議、提出を決めた。当時の町長に提出した地域経済の活力減退、５号機の建設工事ができれば地域経済の波及効果ははかり知れない。早期実現できるよう要望書を提出しました。その後、平成１１年に着工、現在５号機の運転は行っているものの、我が商工会員が直接中部電力との物品の仕入れ、仕事を請け負う契約ができず、いろいろと対策は考えているが、発注者側の中部電力が外部との取引が多く、なかなか難しいところもあるので、商工会と

して今後浜岡原子力発電所と浜岡商工会が基本的な考え方として今までの活動の実績、整理の評価を今後の活動の方向性と取り組み方を協議し合い、商工会事業活動に深く取り組んでいきたいと思います。

また、観光面にも浜岡原子力発電所と地元商工業者の特色を生かし、特産品のPRを行い、新たなビジネスチャンスをつくり上げ、商工業の活性化を図っていきたい。平成15年度に御前崎町と浜岡町が合併、御前崎市になりましたが、浜岡原子力発電所は日本でもまれな場所に立地され、住宅地との間隔がありません。小さな事故に対しても非常に影響が大きいと思います。我々原子力発電所の立地地域住民とし、また商工業者として安全性を願うばかりでございます。今後、プルサーマル問題も近いうちに考えられると思います。あわせて我々住民に国と事業者はわかりやすい説明をお願いしたいと思います。

以上でございます。ありがとうございました。

中村コーディネーター ありがとうございました。片山さんでした。

続いて、鈴木さん、どうぞお願いします。

鈴木氏 皆さん、こんにちは。鈴木俊夫と申します。よろしくお願いいたします。

初めに、国の原子力委員会委員の先生方、全員が今日はこちらへおいでいただきまして本当にありがとうございます。

私はこの地で生まれ、この町に育ちました。そして、現在も御前崎市に住んでおりますことを大変誇りに思っております。それは、かけがえのないふるさとをこよなく愛した先人たちが葛藤の一時期を乗り越えて、国のエネルギー政策に呼応して電源立地に理解を示し、そして地域発展への道を築いてくれたからであります。

先人たちの原子力発電所建設の設置の要といたしまして、やはり地域の飛躍的發展を図り、これを住民の幸せに結びつけていこうという、そこに合意形成の的を絞って先人たちは電源立地への道の英断を下されたわけでございます。そして、私たちはそれをしっかりと受け継ぎまして、次の世代へと繋いでいこうということで今希望を持って頑張っているところでございます。

先ほどもお話がございましたように、昭和42年、浜岡原子力発電所建設の話が中部電力から旧浜岡町並びに関係漁協に持ち込まれました。この年に生まれた人たちも既にもう38歳になっております。将来に向けての原子力発電所のある地域をまさにこの人たちが中心となって引っ張っていかなくてはならない時期に入ってきておるわけでございます。

私はこの若い世代の人たちに改めてこの御前崎市にとって、また周辺の自治体を含むこ

の地域にとって原子力発電所がなぜここに存在しているか、先人たちの尊い教えの原点を詳しく知るためにも、そうした原点に立って情報を提供する必要があると思っております。なぜなら、国のエネルギー政策に呼応した社会的意義や原子力発電所との真の共存共栄の基本理念というものが時を経るに従って風化してしまう心配があるからであります。

原子力発電所は安全が最優先されることが必須の要件でございます。原子力発電所は計画から建設、運転管理に至るまで法律に基づいて一元的に国が責任を有することになっております。しかし、立地に伴う問題発生は地域レベルのものが大部分を占めておりまして、市町村にゆだねられる点が多くあります。住民の生命、身体、財産を守る上からも、その責務は一義的には自治体にあることは否定できません。私たちの市でも電気事業者との間で取り交わされた安全協定に基づいて、組織、機関の中で環境放射能の調査を行い、その結果は関係自治体の住民にくまなく報告されております。3カ月ごとの環境放射能の調査結果を年4回広報しており、かなり高度な専門レベルのものをわかりやすく説明しようとする行政側の努力が紙面にあらわれていることを感じながら、私はその内容を見せていただいております。

浜岡原子力発電所は比較的平穩のうちに運用をされてまいりましたけれども、定期的な広報にとどまらず、新しい話題が発生した場合はタイムリーにその情報を届けていただくことを願うものでございます。企業や行政は速やかな情報開示というものが必要でございまして、公表の遅れが不信や不安を招く要因になったり、あるいはまた場合によっては大きな社会問題に発展しかねないからでございます。

また、原子力に関してはとかく難解な言葉が日常語のように使われがちです。放射能、放射線の量や強さの単位、耐震構造の単位、設計単位、他方ブルサーマルやMOX燃料、あるいはまた経年原子炉の延命化、さらにはシュラウドなどといった原子炉構造物の部位の名称まで、トピックスとは言い難いのでございますけれども、末端の住民にとってはいわゆるトピックスに対する情報を知りたい人には知りたいだけ提供するのも大事なことでないかと考えております。

ブルサーマルって一体何のことだろう、なぜ今こんな言葉が出てこなくてはならないだろうか。住民の知りたいことはたくさんあります。原子力施設がなければ住民の関心も低いことと思いますけれども、でもこの地域の住民は38年間も原発とのかかわりを持ってきました。そして、将来も原発が存在する限り原子力施設とのかかわりはなくなりません。

私は数年前、タイトルが「浅根に建つ」、サブタイトルが「電源立地に人生をかけた先



人たちの記録」という本を自費出版いたしました。この本の結びの中で、私はこのように述べておきました。

まちづくりの基本は人であり、人の社会は心によって支えられるものである。そして、すべてのことの原点は理解と納得の上に成り立つものであり、お互いが地域づくりに向けて困難を克服してこそ、そこに成果が期待できるものと思っている。その昔、城を中心に城下町が発展し、神社、仏閣のあるところに門前町が栄えてきた。そして、今原子力発電所のあるところはどこの地域よりも活力に満ちた人々が心豊かで、安心して暮らすことのできる地域でなくてはならない。そのためには、多面にわたる波及効果を最大限に吸収するよう、町の進む方向を適切に誘導する必要がある。このように申し上げます。御前崎市は合併して2年目、人口3万6,000、極めて小粒ですが、将来に向けてきりと光る御前崎市、そんな夢を抱きながら、一市民として毎日を頑張っております。

終わります。

中村コーディネーター ありがとうございました。

ここで、ちょっと時間的にはオーバー気味なんですけど、半分の5人の方が終わられましたので、コアメンバーの皆さん、何かお聞きになりたいこと等がございましたら伺っておきますが。

吉岡さん、どうぞ。

吉岡委員 今日は10名の方に発表者としてお越しいただきまして、またフロアにはたくさんの方にお越しいただきましてありがとうございます。

若干コメントしたいことがあるんですけども、この会は市民参加懇談会と言っていますけれども、原子力委員が今日は全部出席しておりまして、ここで知りたい情報は何だというふうに具体的に言っていいただければ、それは原子力委員会は委員会設置法により、各省庁に必要な情報を請求できる法的権限があるわけですから、今までも幾つか言っていましたけれども、これからはぜひ具体的な情報についてお聞きになってください。勉強すればするほど知りたい情報というのは増え、また細かくなってくると思うので、その辺をこれからの議論でぜひご留意いただければと思います。

それで、私が気になったのは大澤幸子さんの知りたい情報は届いているのかということです。喉頭がんのお話を伺ったんですけども、喉頭がんのだんなさんがなられたときに、あなたはどのような知りたい情報があって、どのように調べられたのかということと、あとはだんなさんが知りたい情報は一体何であり、どのように知ろうとしたかということです。

わかる範囲で結構です。

中村コーディネーター プライバシーのことで申しわけないんですけども、もしお答えいただけるならばお願いします。

大澤（幸）氏 放射線をかけるということは、ロシアの方のチェルノブイリで、甲状腺が悪くなるというのがありました。今現在甲状腺にも問題があるようなのですが、今は二ヶ月に一度県立病院の方へお世話になっておりまして、特定疾患ということで治療を受けておりますが、特別日常に差し支えなく生活しておりますので、本人も一日も休まず薬は飲んでおります。一度も忘れたことのないお薬ですが、特定疾患ということで頂戴しております。

それと、先ほども申しましたかもしれませんが、本人が告知されてなかったもので、今ここで私が13年過ぎたところでプライバシーを申し上げましたけれども、私は本当は言うつもりもというか、本人に隠していたことを今ここで言うのにためらいもありましたけれども、知りたい情報の中、商工会の役員をやっている中で放射線の講演会を開いたりして、中でこういうこともあるんだなということを知った上で、放射線治療を受けさせ、今受けさせてよかったなという感じを受けておりますけれども、本人は病気を知りませんので、本人の知りたい情報というのは、甥っ子たちがアガリクスですか、あれの本を持ってきたり、猿の腰掛をお見舞いに下さったりした方の話かもしれませんが。だけど、それを本人は触れられなくて、捨ててしまいました。そういうこともありました。本当にこの治療をするまでには、本人は今まで封筒を開けたこともない、通信とか、そういう郵便物も開けたことのない人が放射線治療をして帰ってきてからは、全部開けています。自分はどういう状態なのかということを知りたいのかなと思うけど、本当にああいう切ない生活はもう二度とやりたくないなと思っております。

中村コーディネーター 大澤さん、1つだけ確認させていただきたいのは、多分吉岡さんの質問の趣旨なんですけれども、いろいろ日常の放射線とか放射線治療のことを講演会や何かで勉強されていましたよね。それで、ご主人の放射線治療というときに、大澤さんの中にある情報として放射線のこと、放射線医療のこと、そういうものがあってご主人の治療に至ったという感じでしたか。

大澤（幸）氏 それもありますが、それはお医者さんの方で本人に病気を告知すると治療しないで帰ってしまうかもしれないから、病気は言わないということで先生とお約束して治療を始めました。がんにならないための治療ということで進めてまいりましたので、

いま、もしこのケーブルテレビで知ったりしたときには、びっくりしていると思います。ここにお聞きの皆さんは、私の主人にもし本人の耳に入らなかったなら、ここの場はここの場で過ごしていただきたいと思っております。

中村コーディネーター 失礼しました。プライベートなことでもあるので、これ以上は伺いません。

小沢さん、一言どうぞ。

小沢委員 片山さんにお伺いしてよろしいですか。

2つほど伺いたいんですけれども、国の建物とか公共の建物がある地域、人口3万5,000ぐらいに今ふえていらっしゃるようですが、そういう町に来たときというのは、それに伴っていろいろな補助金がふえていくということはないと思うんですよね。私の住んでおりました浦和というところは、何か合同庁舎みたいな外国人の入管事務所みたいのができまして、かなり大きい規模だったんですけれども、そういうことはなかったような気がするんですけれども、先ほど随分たくさんいろいろな町の経済の発展に寄与するようなお金がというお話がありましたが、それはなぜだと思いにになりますか。

片山氏 この電源三法とか、そういうもののおかげで、こういう施設をつくっていくということがあったんじゃないかと思えますけれども。

小沢委員 なぜ電源三法ってあったんでしょう。

片山氏 ちょっと私もそこまではね。

地域の振興とか、電源会計、そういう資金があったがためにできたんじゃないかと思えますけどね。

小沢委員 それは何でそんなに原発があるとお金がたくさん来るのかというようなことについての論議というのは。

片山氏 一切そういうことはしたことはありません。我々はとにかく商工会として、何分にもこういうふういろいろな施設ができるかたわら、いろいろな資金の運用をしたいがために、市の方へ、現在市ですけれども、市の方へ要望してお金が出てくれば運営が楽になるということを前提にやっているわけですから、細かいことまで、行政の中まで入ってやるということはちょっとできないんじゃないかと思えますから。

小沢委員 ありがとうございます。

もう一つそれに関連してなんですけれども、もし反対の声だとか、そういうものがなければ、もう少しほかの原発関連の施設を受け入れてもいいというお考えは、例えば個人的

にでもお持ちですか。例えば、今燃料の廃棄物の場所が困ったりしているんですけども、そういうことだともうちょっと今までと違った形でまたお金が出ることが考えられると思いますけれども、そういうことだったら。

片山氏 個人的には、これ以上施設は要らないじゃないかと、そう思っておりますけどね。なぜかといいますと、施設をつくればつくるほど、それなりの負担がかかり、いろいろな面で、私ばかりでなくて住民みんながそれに管理していく費用とかがかかるものですから、これ以上100%の施設じゃないかと思っておりますけどね。

小沢委員 お金としても十分経済に潤ってきたからもういいと。

片山氏 そういう意味ばかりでなくて、これからどんどん、どんどん償却し、いろいろな面で行政の中でお金もかかりますから、そちらの方へ福祉、医療とかという方へ回していった方がいいじゃないかと思っておりますけど。

小沢委員 それは原発関連のお金ということですか。

片山氏 そうです。

小沢委員 それはまだあった方がいい。

片山氏 いいですね。お金はたくさんあればあるほどいいから。

小沢委員 それでは、もう一つちょっとだけね。5号機がとまっているということでした。そういうもうわかっている発電所ならよろしいですか。次が危ないとか、心配なければもう少し発電所の数はふえていってもよろしいですか。

片山氏 そうですね。活性化していくには、ここの市は企業というのがすごく少ないんですよ。今までそれこそ中部電力におんぶに抱っこされてここまで今まで来たと思います。よって、そういうお金がどんどんあれば、お金が出るものがあれば、私としてみればまだ今現在はそんなに危険なものじゃないかと私どもは思っていますから、6号機、7号機ができて不思議はないんじゃないかと私は思います。これは商工業としても活性化になる糸口だと思いますからね。

小沢委員 ありがとうございます。

中村コーディネーター 次へ行きたいんですけども、新井さん、簡潔にひとつお願いします。

新井委員 別に質問ということもないんですけども、鈴木さんにお話だけちょっと聞かせてください。

先ほど原子力と国のエネルギー政策ということをご指摘なさったと思うんですが、この

ような土地の場合、御前崎のような場合は原子力がありますから、安全性ということの問題が前面に出てきてしまうと思うんですけれども、それは当然なんです、今石油情勢なんかを考えると、原子力の存在というのは非常に大きなものであったと思うんです。こういう土地で鈴木さんたちが議論をなさる場合に、原子力だけに限ったことではなくて、天然ガスもありますし、いろいろあるんですが、そういう総合的な視野からお話をするというようなことは結構あるんでしょうか。

鈴木氏 話す機会というものは少ないんですけれども、自分自身の認識としては原子力エネルギーを使う一方で、風力、それから太陽光、それからそのほかのいろいろなエネルギー源の多様化といいますか、そうした形の中で総量として多くのエネルギーの得られる原子力を推進していく、こういうことは自分の認識の上ではそういうふうに思っております。ただ、安全性最優先ということでもありますから、安全性に疑問が生じるようであれば、これはその疑問を消去してから前へ進む、それまでは取り組めないと、こういう考えを持っております。

新井委員 物理的な安全性の問題もありますけれども、日本全体の経済的なシステムを維持していくためのエネルギー政策上のセキュリティという問題もあると思うんですが、そういうところに視野が広がるということは余りないんでしょうか。

鈴木氏 原子力発電所のあるところは地方でございまして、エネルギー全体のセキュリティまで視野が広がっていくというのは、勉強会等では出てまいりますけれども、みずからそこまで進んでいくということは少ないんじゃないかと思っております。

中村コーディネーター ありがとうございます。それは立地に限らず、大消費地でも同じ状況に今のところあるんじゃないかと思いますが。

それでは、また発言者の皆さんのご発言を伺ってまいります。

お待たせしました。藤原さんから再開したいと思います。お願いします。

藤原氏 市内池新田から来ました藤原です。よろしくお願いします。

中村さん、オーディエンスをやってもよろしいんですかね、趣旨に反しませんか。選択肢2つのオーディエンスなんです、皆さんに聞きたいんですが、挙手でお願いしたいんですが、よろしいですか、趣旨に反しますか。

中村コーディネーター 趣旨には反さないですけれども、ご意見をおっしゃるために必要という。

藤原氏 かなり必要になります。

中村コーディネーター　そうですか、それでは時間の範囲内ならいいですよ。

藤原氏　簡単です。知りたい情報は届いていますかと、これに関することなんです。

きのう静岡新聞に中部電力が戸別訪問をするということで、第1号でモデルケースみたいな感じでテレビとか新聞に出た。その68歳の男性の方が実は中部電力の7年前に退職した社員であったと、そういう情報が静岡新聞に出ていまして、それを僕なんかが見まして、これってやらせじゃないのって思うんですよ。この会場に集まっている参加者の皆さんはそれをやらせと思うのか、思わないのか、それを僕は知りたいんですよ。

中村コーディネーター　もし藤原さんに協力していただけるなら、どうでしょう、やらせと思う方に挙手していただけますか。

藤原氏　そうですね。

中村コーディネーター　こういうやり方はやらせだろうと思われる方、協力される方は手を挙げてみてください。

藤原氏　わかりました。

ちょっと前でしたら、こういうのをほとんどの方がやらせじゃないかって思うような話だと思うんですが、今日も僕は午前中、中部電力の戸別訪問の方が2人見えられまして、話をしたんですが、その中で去年の2月21日に中部電力は午前11時台に火災を発生させています。それで、消防自動車が出動しているような火事です。その日の夕刊では1平米の焼失だということで、朝刊には10平米に変更されていましたが、その原因が水素ガスを放出しているときに静電気が発生して、外壁に付着したさびに熱を持った水素ガスが引火して燃焼を起こしたというふうな形で、後日3月19日の新聞で出ていました。その火災が終わって、翌年、ことしの6月30日です。9時10分ごろ、また火災を発生させています。

私は池新田に住んでいるんですが、その火災の発生を知ったのがNHKのテレビ番組で全国版で、「静岡県の浜岡原発で火災発生」というテロップが出ました。それで初めて知りました。9時10分に発生しているということで、市民にはほとんど音さたがなかったということになります。その後、知った直後あたりで「ただいま鎮火しました」云々のあれが出たんですけども、それは僕は聞いていません。聞けなかったというか、聞き取れませんでした。

そういうように、2年立て続けに火災を発生させる事業所って果たしてあるのかなって僕は考えたんですよ。普通の事業所でそういうことをしたら、どういう処分を受けるか

などが、いろいろ考えたりしたんですよ。中部電力の浜岡原発というのは、ひとたび事故が起こったら何十万、何百万が被害を受けるような事業所です。そういった事業所で連続して、毎年のように火災を発生させている。これはどういうことですかということでは僕は聞いたんですが、彼らの答えでは人為的なミスはなかったと答えました。作業手順は特別変わった手順でやったわけではないということです。

それであるならば、今まで同じように水素ガスの放出もしていたし、ベルトコンベアでドラム缶の移動もさせていたわけですよ。それがどうしてそのときだけ火事になったのかって不思議でしょうがないんですよ。人為的ミスがないのであるならば、作業手順に問題がなかったのであるならば、これはどういうことかと、僕なんかの考えでは施設の老朽化って考えられることじゃないのかなって僕は思うんですよ。皆さんどう思われるかわかりませんが、私はそういうふうに思いました。

それで、今回のプルサーマルの件でも、先月のあれはたしか土曜日でしたが、１７日だったと思いますが、中部電力のチラシがこの界限に入りました。プルサーマルを実行いたしますと断定的な内容のものでした。これは事前了解を前提にした県と中部電力が交わしている安全協定、その中にその文言は入ってないですね。だから、そういうようなことが言えるのかと非常に僕としてはそういった強行をしますと、まさにやります、やらない選択肢はありません、こういうようなチラシが入っている。知りたい情報って、そういう情報なんじゃないかな。対立する情報というのを私たちは受け取ることができません。どこも出してくれません。こういうことが今この浜岡の原発状況の中で起こっていることなんですよ。

皆さんに聞きたいと思うんですが、隣の家に越してきた住人が毎年のように消防自動車がかかるようなトラブルを起こしている、そういう人に隣にいてもらって大丈夫というように皆さん思われますかね。自分たちは安全なんだと思いますか。極めて僕は単純なことを言っていますが、私たちはすべての利得を得る前にまず考えなければいけないのは身の安全です。安全性です。にもかかわらず、ここの事業所は毎年のように火災を発生させている。私たちは利得を享受する権利もありますが、安全を得る権利も持っています。どちらかといえば、安全を得る権利を僕としては優先させたいです。私たちみたいな一般の人間は、年間１万前後の電源立地何とかやらといって毎年１１月ぐらいに銀行からお金が入ってきます。メリットといえばそのくらいですね。あとは近くにひとたびチェルノブイリ級の事故が起これば、まず生きていけないんじゃないかというような、そういった代物が存

在しているわけです、原子力発電所というものが。

彼といろいろ話、今日技術畑の人間が来ましたので、結構詳しい話もできたんですけども、とにかく彼が言うのは、私たちは冷ます、閉じ込める、止める、これには絶対的な自信を持っていると言いますが、圧力容器内で何かトラブルが起こったときに、それを実行できるだけのすべは彼らは持ってないと思います。その辺で、絶対あなたは自分の命をかけてまで僕に対して今ここで約束できるかと聞きましたら、それは笑っていましたが、オーバーだろうということなんでしょうが、でも僕はオーバーだとは思わないです。

それで、去年僕はいろいろ言いたいことがあったものですから、中部電力のモニターを1年間やったんですが、それでその中で中部電力の広報部の人たちに必ず同じ質問をしました。あなたたちはどう思うかという質問なんです、私は原発のすぐ近くに住む生活とそうでない全く無関係なところで生活をする。どちらが危険だと思うか、あなたは思うかという質問をしたんですね。そしたら、皆さん同じ答えが返ってきました。どちらも同じだと言っていました。

僕の意見はこれでおしまいです。

中村コーディネーター ありがとうございます。藤原さんでした。

続いて、増田勲さん、お願いいたします。

増田（勲）氏 農協の地区担当理事をしております増田勲です。よろしくお願いします。

私は今日のこの「知りたい情報は届いていますか」～これまでと、これから～、これに参加させていただきまして本当によかったなと思っています。ただいまの藤原さんの話も含めて、私たちが知りたい情報がたくさん出てくるなというふうにも感じました。

それで、今までの皆さんと若干話の内容は違うかもしれませんが、私はこの「知りたい情報は届いていますか」～これまでと、これから～、この問いかけに対して、できるだけ真っすぐに考えてみました。会場の皆さんなどは果たしていかがでしょうか。私はこのお話を聞いたときに、関係者の方から知りたい情報は届いていますかといったような話を聞いたときに、おおむね届いているかな、特に不便や不都合とを感じるものはないのではと思いました。また、そうでもないかもしれないなとも思いました。よく考えてみると、この質問に自分としてはよく答えられないということがわかったような状況でございました。

それで、そういうことは私自身が常日ごろ農業を初め、いろいろなことに忙殺されていて、原子力発電所や原子力発電のことについての考える時間とか思う時間が極めて少ない毎日を送っているかなと実は思いました。ですから、特にそういった気持ちになったのか



なというのが正直なところではないかと思います。それで、テレビや新聞などで地震や災害のことが報道されると、原発は安全だろうかと、安心できるかと、安心して暮らせるのかというふうなことをこれは今までの皆さん同様、強烈にこれは感じております。

それで、私たちは情報をいつどんなときに必要とするかと。また、知りたい情報というものを知りたい情報そのものと思うか、思わないか、こういったことが実は質問の中にあるんじゃないかなと思います。情報が発信者側から一生懸命情報を発信してくれていても、その知ってほしいという情報が届いていても、それを知りたいと思う人だけが役に立つといいですか、よく届いたと、知ったよということになるとと思いますし、そうでない人は届いていない、あるいは知らないというような無関心といったような感じになるんじゃないかなと思います。

それで、この情報というものを改めて自分自身で少し考えてみました。これは私も集会の場とかグループの皆さんのところへ時々お邪魔したり、あるいは今回この広告が出てからというもの、幾つかの方からも電話等いただいたりしたこともありますので、感じた部分もあるわけですが、自分が知りたいと思っているときに届いたものと、これはテレビ、ラジオ、新聞などの報道とか、あるいは県、市役所などの広報、広報紙やケーブルテレビ、あるいは発電所からの広報、その他他人から聞くといったことも含めて、届いたものというものと、それから自分が知りたいと思った情報を自分がそれを単に求めてとると、知ろうとしたというようなこと、これも大きい意味の知りたい情報が届いていますかといったときに、届いているというふうに考えることもできるかもしれません。それは県とか市とか発電所に直接出向いて聞く、あるいはケーブルテレビ、文字放送、インターネット、ホームページ、こういったところからとるものとあるんじゃないかなと思います。

それから、もう一つ知りたいと思っていなかったけれども、情報を見聞きするうちに、これは知りたい情報だったと、こういうふうに感じるものもあると思います。私も今日のこの会議へ参加させていただいて、初めの木元座長のお話等を聞きますというと、知りたい情報を言ってくれたなと思ったり、うれしいなと、ありがたいなというような感じに思ったこともございました。そういったことで、自分なりに皆さんのご意見等も聞いたりした中で考えてみますと、3つぐらいになるかなと思います。

私自身も大勢の皆さんも、今までの発言者の皆さんもそうだったと思いますが、まず第1が安全、安心と、これが知りたい情報の一番じゃないかなというふうに感じていると思います。

それから、2番目として、どなたかの発言でありましたけれども、電気の需要とか原子力発電の必要性とか、この発電所そのものが国や地域の発展にどう貢献しているかとか、そういったことで、それらの政策とか、あるいは3つ目としては関連した中でこの補助金というものがどういうふうになっているか、使われているかとか、政策上どういう位置づけにされて、どう出されているかと、こういったようなことも知りたい情報の一つじゃないかなというふうに思いました。

それで、3つそういったことが考えられますが、日ごろの生活の中で改めて思いますというと、原発で何かあったと報道されるたびに、安全か安心できるかというふうにすぐどなたも浮かぶんじゃないかと思います。そして、安全らしいとわかったときには、どう安全かともう少し詳しく聞きたいと、情報を得たいと、こういうふうに思うんじゃないかと思います。そして、あわせて内部で働いてくれている人たちは大丈夫かというようなこと、あるいは今後調査していったとき何か大事なことはないだろうかと、安全であってほしいなと、安全、安心できることであってほしい、これを強く思いますし、大勢の皆さんがそうじゃないかなと思います。そして、少し時間がたち、いよいよ安全らしいと思えるころからといたしますか、そんな時期に私たち農業者から言いますと、次は農産物等への風評被害といったようなものが出なければよいがなと強く思います。そして、さらにしばらくたちますと、これが安全であって、風評被害も出なかったというようなことになると、まずまずよかったと、そして安心すると、こういうような暮らしをなさっている方が多いんじゃないかなと私は思います。また、ある方は私に対して、おれは賛成派でも反対派でもないけれども、心配派だと言ってくださったこともありました。そういった方は、今言ったような感じかなというふうにも思います。

そういったことで、先ほどの今言ったのは1ということで、届けられる情報ということになりますが、2の情報を積極的にとろうというようなことも私も少し試みてみました。それで、市とか原子力発電所等へも行きました。そうしてみますと、それぞれ誠実によく説明もしてくれるし、していますので、こういったことなら、先ほど鈴木さんがおっしゃったような安全第一ということで一生懸命やってくれているということからいきますと、安心かなというようなことも感じました。

それで、安全の中の確保というものには設計上とか施工とか、あるいは完全な施工と、あるいは安全運転管理とか、あるいは子会社、孫会社、下請け企業と、こういったものが本当に安全運転に対して一生懸命管理してくれているかといったようなことも心配の一つ

ではないかと言われる方もありますし、中には具体的に構造物中の鉄管の状況、そういったことを考えたときどうだといったようなこともございます。いずれにしましても、そういったことも聞きまして、私が聞いて知り得た情報では、まあまあ安心していいのではないかなというふうにも思いました。

それで、これからのことということですが、やはり安全、安心をいかに確保するかということを今まで以上に研究、検討していただきたいと。あわせてこれを知りたい情報は何かと、知っていてほしい情報は何か、知りたくなる情報は何かというようなこともよくとらえて、先ほどどなたかの発言にありましたように、タイミングよく届けてほしいなというふうに思います。

また、知りたい情報をどうしたらとれるかというようなことも昨今ではインターネットも含めて、いろいろな御前崎ではケーブルということもテレビによるといったようなこととか、いろいろあります。それらもそれぞれとれるという報道や広報等は流されて大体はありますけれども、さらに今まで以上にこういったことをよく市民の皆さんに伝えと、流すというようなことをしていただく方がもっといいじゃないかなと思います。ですから、市民が情報を容易に早くとれるようにすることといったようなこともあわせて今後していただけたらというふうに思います。

以上です。ありがとうございました。

中村コーディネーター　ありがとうございました。

続いて、増田勇一さん、お願いいたします。

増田（勇）氏　私は、御前崎漁協の増田と申します。

今、農協の増田さんから詳しい陸での情報ということですので、私、漁業者といたしまして、ここの会場の皆さん方はご存じであるかどうかということで、原子力発電所から流される温排水のことで、私は漁業者として直接携わっておりますものですから、一言言わせていただきたいと思います。

中部電力が佐倉地区に原子力発電所を建設ということで、先ほど皆さん方がおっしゃっているように、昭和41年に話が我々漁業者のところへ参りまして、当時の佐倉漁協と御前崎漁協とは、町は合併していなくて別々なんです、漁協は合併しておりまして、今、原子力発電所の西側の新野川までが御前崎漁協の地先漁業権というのが漁業にはありまして、地先漁業権の区域でした。

それで、先ほどからも意見が出ておりますように、浜岡町は原子力発電所建設に向けて

賛成、我々は、町は違って御前崎の漁業者は、漁業権は浜岡地先の肝心な、原子力発電所の地先に漁業権を持っておりまして漁業を操業していたんですが、漁業者のところへは、そういう発電所の建設という正確な話は、浜岡町からはなかったように思います。それで、私どもは当然のことながら、温排水のことで心配いたしまして、当時の発電所の動きは、浅根漁場といいまして、その浅根漁場は海底生物の宝庫でもありまして、海底生物と申しますと、アワビ、サザエ、イセエビなど多種多様の生物が生息しておりまして、その浅根漁場は優秀な磯根が点在しておりまして、海水の水温も環境もすべて魚に適していて、多種多様の魚が住んでいたと思います。そこのところへ、当然、正常の海水とは8度も高い温排水が、1号機だけでも毎秒30トン、現在で5号機まで全部稼働しますと、1秒間に400トン近い温排水が流れ出るんです。当然のことながら、我々漁業者は、海中・海底の環境を心配しまして、いろいろ反対運動も3年間ぐらいやりました。

だが、県の水産課、また原子力発電所推進派のいろいろな方々から調整が入りまして、まだ私も年が若くて中身のことはわかりませんが、いろいろ調整の結果、原子力発電所が昭和46年から建設が進んだということで、当然のこと、調整のうちにも地域の漁業者と発電所との振興対策という約束もなされたと思います。そういうことで、温水を利用した温水利用センターというものができまして、そこで稚魚、稚貝の生産が始まりまして、それを漁業者のための放流事業として、稚魚、稚貝の放流を相当な数で行いました。

それで、昭和51年から稼働しまして、昭和の時代は、海には多少は影響があったと思いますが、大した影響は認められなかったんです。やがて、平成の時代に入ってきてまして、一番肝心な私どもが若いとき心配された磯根が、海底が磯枯れという状況を起こしまして、磯枯れというのは、海の中の海草が全滅して枯れちゃったことなんです。海草が枯れると底生生物は、当然ながらアワビ、サザエは死に絶え、小魚は海草を隠れ家としておりますものですから、小魚をえさとする魚も寄りつかなくなりまして、今、浅根沖は壊滅状態となっております。

浅根だけかなと私たちは思っていたんですが、だんだんその磯焼けが東に広がりまして、御前崎の灯台沖、やがては駿河湾の中まで磯焼けが広がってしまいました。それで、私たちは、温排水の関係のない方までそういう磯焼けが広がったものですから、磯焼けと温排水との因果関係は結びつかないだろうなという素人考えです、これは。それは、情報がないために素人考えで、そういう磯焼けに対しての詳しい情報がないものですから、我々はそう思ったんです。

それで、今現在、発電所の前面の前面海域調査委員会というのを毎年、春夏秋冬と4回行っているんです。そこで、昭和40年、開設する前から海底調査で環境の変化を調べているものですから、調査を行っております。そこで、調査の資料も40年近くやっているものですから、莫大な資料があると思います、海中調査が。

そこで、私も平成13年からその委員会に入らせていただきましたものですから、平成3年ごろが一番ひどく磯枯れになったときに、どういう調査結果で、磯枯れがないときと生じたときとは、そういう調査に狂いがあったんですかという10年も前のこと質問をさせていただきまして、そして調査資料、以前のものを調べていただきまして、次の委員会に出たとき、私からの質問に対して、その磯焼けした当時のデータを調べましたが、異常はありません、磯焼けを乱すようなデータに狂いはありませんでしたと、そういう回答をいただきまして、果たしてこの調査方法、調査結果であれだけ海の中に 皆さんは海の中を見たことがないもので、ぴんと頭の中にはこないと思いますが、私は実は、若いとき、二十歳代から、宇宙服のようなああいう衣装をつけて海の中に潜る潜水夫という商売をやっておりまして、海の中の変化は刻々と見てきましたものですから、これは陸で言うと草木が全部枯れちゃったようなことになるんですが、そういう一大異変が起きたにもかかわらず、調査結果には異常はなかったと。そういう知りたい情報がわからないということで、今現在に来ておりますが、これは国策である、国であり県である原子力を進めている皆さん方は、陸の調査は皆さん今までの方がずっとおっしゃったもので、陸のことに対してはかなり調査結果が進んでいると思います。

だが、我々漁業者にとっては、海の中の知りたいことが、余り大して入ってこないというか、そういうジレンマがあります。皆さん方の今までの発言を聞いていて、そういうことで海中・海底の調査結果が、国とか、そういうところで行われて、我々に詳しい情報がいただけるものかどうか。今、中部電力は自分の会社で自分の調査委員をつくって、温排水を出す火力発電、原子力発電がいろいろありますが、日本でも相当ありますが、その発電所の中では一番中身の濃い熱心な調査をやっていると伺っています、中部電力の浜岡原発が。

だが、それにもかかわらず、そういう異変が起きたことが表に出ていないということが、調査方法がこれでいいのかなのか、我々にはいまだかつて……。

ただ、今まで、温排水かどうかは、私も答えがないですから、はっきり言えません。だけれども、一番漁業者が困っているのは、そこで獲物を得られない、以前のような豊かな

海が得られないということで、我々は今、以前のような豊かな海を取り戻すために、関係であります静岡県、全部稼働した場合に毎秒400トン近くの温排水を流している中部電力も当然協力してくれまして、磯焼け復活対策事業というのを旗揚げして行っていますが、まだ全然回復の兆しは見ておりません。

そういうことで、我々漁業者は、今、いろいろ苦しい時代に入っております。燃料高騰があります。今のこの燃料高騰については、当然、魚の輸送コストも上がります。燃料高騰によって、魚価が下がるんです。燃料が上がると、魚が下がるんです。それは、皆さんご存じのとおり、輸送コスト、スチロールの箱代、いろいろ魚屋さんの経費が大いにかかってきます。ということは、第1生産者である海辺の魚をたたかないと、安くしないと、自分らの利益が上がらないという、いろいろなそういうシステムは皆さんご存じだと思います。そのあおりを受けているのは、我々漁業者なんです。

だから、一般市民の方は、多分、漁業者は発電所と余りにも交流が少ないのではないかなと思われる方もおりますが、我々はあれだけの反対運動をしたんです。そこで、いろいろな方が調整に入ってくれて、「いや、あんた方はそういうことを、自分らだけは目先のそういう被害をもしかすれば被るだろう。だが、被ったときには、あなた方には決して損はかけません。あなた方の将来の漁業のことには、振興対策というものがありますから、面倒見ていきましょう」という約束事、第1号炉をつくるときにはそういう約束があつてできたと思います。条件つき同意ということ、我々若いとき、よく聞きました。条件つきということは、漁業者から条件を出されたことを、県・国・電力会社が受け入れてできたものと、私個人はそういうふうに解釈しているんです。

だが、今こうなった時代において、そのとき原子力発電所を進めてきた国・県、周りの団体が、漁業者が今こういう事態になっていますということを、我々の意見をご存じかどうか、この場で私は言わせてもらいたいと思って参りました。そして、私は後輩に対して、今までのようなきれいな海を残していきたいのが、今、私、組合長として一生懸命ですので、どうかまたここにおいでの方皆さんも、これから漁業の振興対策をしていただくのも当然だと思いますが、今後の海の回復をできるよう、皆さん方のお力をかしていただきたいと、このように思います。

以上です。

中村コーディネーター 増田さん、ありがとうございました。

続いて、柳沢さん、どうぞ。

柳沢氏 柳沢静雄でございます。御前崎佐倉の住人でありまして、浜岡原発の風下、１キロメートル以内のところに住んでおります。

ちょっと年のせいかもしれませんが、最近とみに、ろれつが回らなくなりまして、お聞き苦しいかと思えますけれども、よろしくお願いします。それで、その対策の一つとして、先ほど別の発言者の方が言われましたけれども、外へ出たところの受付に私の名前の入ったレジュメがたくさんありますので、休憩時間に必要な方はお持ちください。

これまで、浜岡原発の現地の住民の心配事の大きかったのは、東海地震の問題。これが来たら、それを引き金とする原発震災というものが起こるのではないかということであつたんですけれども、私どもは、「地震はとめられないが、原発はとめられる」ということを合言葉にして、東海地震の起こる前に原発をとめろということを中部電力に要求しているわけですが、そこで、これはマグニチュード８．５と言われるちょっと大きな地震ということで予想されていますので、もし起これば、原発が事故を起こさなくても、地震だけでもこれは大変なことになると。特に、我が家などは築６０年を過ぎておりますので、うちがつぶれて下敷きになる可能性も高いと。そこへ放射能が注いでくれば、とてもじゃないが、命が幾つあっても足りないということで非常に心配しております。けれども、我が家に十分な耐震補強をする経済的余裕はありませんので、どうしようもないという状況でございます。

それで、プルサーマルの問題が、そこへまた起こってきたわけですが、私が申し上げたいのは、原発というものは、東海地震なりプルサーマルの問題なり、そういうことが迫ってこなくても、今のままでもう非常に危険なものであるということを、非常に感じておるわけです。このことは、私自身が口を酸っぱくして今ごろ申し上げなくても、いわゆる原発推進派と呼ばれる方々が昔から非常によく知っておられるということを、私は証拠を持って知っております。

そのことは、何にあらわれているかと申しますと、１９５９年に もう随分前ですが、日本政府が、当時は原発の担当は科学技術庁でありましたけれども、その科学技術庁が「大型原子炉の事故の理論的可能性及び公衆損害額に関する試算」、これを原子力産業会議に委託してつくりました。その内容は、これは当時、東海原発１号機と、これが１５．６万キロワットという今に比べれば非常に小さい原発ですが、とにかく日本の商業原発の第１号でありまして、これの建設が迫っていたわけです。それで、その場合に、これが大事故を起こした場合に備えて、賠償額を県と決めなきゃいけないということ

で試算を行ったわけです。それで、事故が発生した場合に、人的被害の規模とか負傷者の治療費とか、それから事故の犠牲者の葬式の費用とか、さらに慰謝料まで含めて大変事細かに試算をしたわけですが、結論としまして、最悪のケースでは3兆7,300億円、当時のお金です。これは、当時の国家予算の2倍以上です。その被害が発生するという結論を出しました。この試算はそういうことで、東海原発1号機、これは1966年7月に実際には運転を開始したわけですが、その建設が迫っておったためにやったわけです。事故を起こした場合の賠償額を定めなきゃいけないということで、法律を制定しなきゃいけないと。それで、現在、日本政府は原発を国策としまして、これは長いですが、それで原発は安全ということを盛んに宣伝しておるわけですが、実際にはこんなにも早い時期から、原発というものが大事故を起こす可能性があるということを政府はよく熟知しておりまして、そしてその事故発生に備えて準備を着々と進めていた、これが実際であります。

それで、もう一つは、先ほど申しましたが、東海原発1号機、15.6万キロワット。現在、100万キロワット級が主流ですので、これに比べたら非常に小さいわけですが、それでもこれくらいの大被害が出るということですね。これは、重大であります。それで、当然、当時の日本政府は、このような試算の内容がもし国民一般に知れると、ショックが大き過ぎて、東海原発1号機の建設そのものがとんざするのではないかと、いうことを恐れまして、そこで1961年4月の国会で、原子力損害賠償法、これは略して原賠法とも言いますが、それが成立するわけですね。それで、試算はもはやお役ごめんと要らなくなった。そして、その内容はもちろん、試算をしたことまでなかったということにしちゃって、マル秘扱いしちゃったわけですね。それで、約40年間に渡ってマル秘扱いしてきました。そして、やっと1999年に、ようやく国会で一部の勇気ある議員が政府を追求しまして、やっと全面公開されたという、これは私なんかは今でも鮮明に覚えているニュースですが、そういう結末になったわけです。そういうことがありました。

それから、そのときにできた原子力損害賠償法、原賠法ですが、この内容ですね。これは、このような過程を経て制定されたということでありまして、内容自体にその性格がよくあらわれております。そのことを、2カ所ご紹介します。

1つは、損害賠償額が一定以上の巨額に達するときには、国が私らの税金で肩がわりすると。だから、その分は、電力会社は払わなくてもいいと。



それから２番目、原発事故の原因が異常に巨大な天災地変又は社会的動乱であった場合には、この「社会的動乱」というのは革命とかそういうことだと思いますけれども、電力会社は完全に免責される、何も払わなくてよいという内容になっています、この法律は。

とりわけ政府は、後半の方の異常に巨大な天災地変又は社会的動乱の場合には電力会社は完全に免責されるということは、東海地震がもし起こった場合には、中部電力はもう完全に一切責任を問われないと、そういうことを言っているに等しいわけですね、現在考えると。そういうことで、私は思うんですけれども、原子力損害賠償法というものは、本質的には原発事故発生時の電力会社救済法であると、そう言うのが正確であると私は考えております。

結論です。原発推進策は、本質的に民衆と相対立するものである、相入れないものであるというのが結論であります。このように、原発推進事業は、日本の原子力開発におきまして、初期の段階から一貫して自分に不利な情報を徹底的に隠しまして、原発は絶対安全ということをやりたい文句にしてきました。国民や原発現地の住民を欺いて、強引に原発建設をこり押ししてきたわけです。

私は今つくづく思うんですけれども、原発推進政策は昔も今も、終始一貫して民主主義の否定の上に成り立っていると。そもそもなぜかと申しますと、民主主義が存在するためには、社会の構成員全体が同じ情報を共有した上で、各人が平等な立場から十分に論議を尽くして、その合意に基づいて政策を決定していくことが絶対的に必要であります。それがなければ、つまり、自分に不利な情報を隠したり、ある特定の人々に情報を知らせなかったり、差別して議論の場から除外するということをしていては、これは民主主義ではない。そういうことを本質的に必要とする原発の建設は、これは民主主義の否定であるということが私の結論であります。

以上です。

中村コーディネーター　ありがとうございました。柳沢さんでした。

お待たせしました。最後になってしまいましたけれども、山下さん、お願いいたします。

山下氏　御前崎町商工会から参加させていただきました女性部長の山下マサ子です。よろしくお願いいたします。

私は、原子力発電が必要だと思っている者です。その理由として、地球温暖化が進んでいる今、どこの家庭も電力使用を減らす努力をしている家庭は少なく、たくさんの電力を使い続けていると思います。この地域は、大人が１人１台以上の車を所有し、ガソリンも

たくさん使い、CO<sub>2</sub>をたくさん出しております。大井川の川の現状も見たいということで、2年続けて見せていただきました。水力発電がたくさんあり、川の水は少なく、川の水をもとに戻すためには、水力発電を減らし、原子力発電に頼るしかないのかなと思いました。石油も、いつまでもある資源でもないし、値段も高くなります。

御前崎には、風力発電が3基あり、CO<sub>2</sub>は削減しておりますが、風がない日は回りません。風が強く28メートル以上吹くと、保安のためにとまります。600キロワットの風力発電で、500戸の電力が賄えるそうですが、浜岡原発の5号機と同じ出力を出すためには、風力発電を400基くらいつくらないと同じ出力にはならないそうです。風力発電では、一部の電力を賄うことはできますが、自然エネルギーに頼るのもなかなか大変だと思います。

東海地震はいつ来るのか、どのくらい大きな地震が来るのか、浜岡原発は大丈夫かと、大変心配はありますが、立地のとき、固い岩盤という調査がなされ建設されました。日夜、事故を起こさない。起きたときには最小限に済むよう、研究・改良が行われていると思います。安全と言う中部電力さんを信頼し、信じるしかありません。私は、東海地震が起きたとき、最後まで残る建物は浜岡原発の建物だと信じております。

電源立地の交付金で市の施設も充実し、いろいろな商売をしている人も、大変恩恵を受けていると思います。そして、浜岡原子力発電の中で、地元の人がたくさん勤めさせていただいております。

私は、横須賀にあるペレットをつくっている工場も3回見学させていただきました。そして、原子力館の中の模型での説明、現場の工事の様子を何度か見学する機会があり、見学させていただきました。5号炉の見学のときに、1メートルのコンクリの壁にもびっくりしました。

地球温暖化が進んでいる今、CO<sub>2</sub>を出さない原子力発電、そしてプルサーマル浜岡原発計画も、エネルギー資源が少ない日本では、使い終わった燃料の中に、ウランや新たに生まれるプルトニウムを再処理工場で回収してリサイクルし、MOX燃料として使われるのは心配があるのかないかわかりませんが、中部電力さんが「安全です」と言うなら、信頼して信じるしかないかなと思います。

原子力発電で起きた事故等は、大小にかかわらず、すぐテレビ、新聞等で報じられますが、専門用語は聞いていてよくわかりません。例えば、去年はたびたび「シュラウドにひびが20カ所見つかりました」と繰り返します。聞いている人は、どんなところにひびが

入っているのかわからないので、「こんなに多くひびが入っていたんじゃ、爆発するかもしれぬ」と思った人もたくさんいると思います。シュラウドとは、模型を出してこの部分のことを言いますと、放送するたびに見せていただきたいなと思いました。そして、その部分にひびが入った場合はどういう危険が生じるのか、大人から子供まで理解できるよう、詳しく説明していただきたいと思います。

原子力発電と原爆とを同じものとして考えている人もたくさんいると思います。私は、中部電力さんの説明のときに模型を見せていただいたので、シュラウドとはどの部分ということを知りました。事故の現場の写真も大事ですが、やはり見ているみんなに誤解されない説明が大事ではないのかなと思います。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございます。

ということで、ちょっと予定の時間をオーバーしているんですけども、後半の5名の方にご発言をいただきました。コアメンバーの皆さん、お聞きになりたいこととかコメントとかありますか。

では、井上さん、どうぞ。

井上委員 井上です。よろしくお願いします。

先ほど、海の中をよく知っている増田さん、私は関西の人間なんですけど、実は1週間ほど前に、福井県の美浜原子力発電の近くの漁業組合の方たちに漁業体験をさせてもらいに、お母さんたちと行きましとき。朝の3時半に起きて沖へ出まして、定置網まで行ったんですね。多分、温排水も出ているかと思うんです、美浜は湾の中なので。

そのときに何を見たかというのと、定置網で毎朝毎朝、大量の魚がとれるだろうと思って楽しみにしていましたが、見たのは越前クラゲ、巨大クラゲ。漁師さんは、1時間かかってそのクラゲを網から外すのに必死だったんですね。そして、それが終わっていいよ魚が揚がるかと思ったら、今日は何もかかっていないと。フグが3箱ぐらいで、もう今日はありませんという状況を見て、本当に自然を相手にするお仕事というのは大変なものと知りました。これが、漁師さんたちに聞くと、中国からクラゲの子供がどんどん大きくなってやってきて、去年までは越前あたりで広がったので越前クラゲと言われたけれども、もうこれからは越前クラゲとは呼ばないでくださいと。越前のイメージが悪くなるから、巨大クラゲと呼んでくださいとおっしゃったんですけども、今年はもう日本海、太平洋側も全部、クラゲがかなり出てきているというようです。これって何でしょう、何でこうい

うことになったんでしょうという話をしていたら、1つはやはり温暖化、海流の変化、水温の上昇、いわゆる氷河が溶けるなど。でも、本当のところはよくわからないというふうにおっしゃっていたので、多分、きれいな磯をお持ちのころの時代と、今の地球全体の環境というものも、随分変わっているのかなという気がしたのです。でも、海のお仕事って、本当に生き物、自然相手で大変だなと思いましたけれども、私も今のお話を聞いて、美浜はどうなっていますかと聞いてみたい思いになります。磯の方はどうなっているの、海底はどうなっているのというのを聞きたいような気がしました。

増田（勇）氏 先生のおっしゃることは、今のことの浜岡前面の海のことでもいいですか。  
井上委員 はい、どうぞ。

増田（勇）氏 それは、先ほどパネルがないものでわかりませんが、海の中には海草とって、カジメ、アラメという種類の丈は1メートルぐらいになる海草、まだ小さい海草、いろいろ暗礁にたくさん生えていますが、それをえさにしている一番主なものがアワビ、サザエ。それで、隠れ家になっているのが、先ほど言いましたが小魚、イセエビなどの多種多様の魚類がそれを利用している。人間が陸の木を利用しているのと同じように、海底でも利用していますが、それが1本もなく、海の中が砂漠のように今現在ではなっております。それも、自然環境、今、先生がおっしゃった温暖化、多分、家庭排水、いろいろの条件があると思います。

だが、そういう状況がまだ海の中では詳しく調査してわかっていないというのが、なぜこの海がこうなったというのがわかっていないというのが、我々漁業者の知りたいことなんです。私からは、こういうわけでこうなったというような答えは、はっきり言って知識はありません。

だが、昭和40年代の海と今とは、比べ物にはとてもなりません。底生生物は、死に絶えて1匹もいません。小魚もいません。そういう状態です。

中村コーディネーター ありがとうございました。

木元座長 今のに関連して、碧海さんもあるし、私もあるので、ちょっと先に。

中村コーディネーター 短くね。

木元座長 1つは、「磯焼け」という言葉をお使いになりましたね。それは、例えば今日は原子力に関する情報ということの一つとして承っているんですけども、井上さんは温暖化の話と絡めましたけれども、「磯焼け」という言葉は、この原子力発電所が来る前からあった言葉ですか。

増田（勇）氏 それは、部分的に多少あります。部分的に、例えば黒潮の温かい海水が沿岸に異常に接近したときに起きるとかということは、以前から言われております。

だが、今現在のような、このような厳しい見渡す限り磯焼けになったということは、初めてだと思います。我々、私で潜水企業が3代目でして、息子が4代目を継いでおりますが。

木元座長 私たちは、情報を今日はたくさんいただいているんですけども、これも一つの情報なんですね。でも、これは全国でそういう磯焼けが、いわゆる原子力発電所があるところで起こっているかどうかにも気になるところですよ。

増田（勇）氏 それは、私にはよくわかりませんが、温排水でそういう答えが出ているということは、尾鷲の火力発電所で新聞とかテレビで出たのを私は見たことがあります。火力発電所で、尾鷲湾がそういう温排水でなったということは、テレビのニュースで聞いたことがあります。

中村コーディネーター 碧海さん、どうぞ。

碧海委員 簡単な質問です。大澤尚登さんに、代表して答えていただければと思うんですが、CATV、ケーブルテレビジョンの普及率はどのくらいか、それからケーブルテレビジョンですと、自治体からの情報なんかも見られるのかどうか。

もう一つだけ、特にこれは大澤さんに伺いたいんですが、先ほどのご説明だと、浜岡の地震の揺れは阪神の10倍という、これはインターネットなんかでもそういう情報があるというお話でした。ということは、この地域には、例えば損害保険なんかで地震保険を特別に勧めるとか、耐震建築を特別に進めるといような動きがあるんでしょうか。

その3点を伺いたいと思います。

大澤（尚）氏 ケーブルテレビの関係ですけれども、普及率がどれくらいかというのは、ちょっと私ではわかりません。

というのは、去年4月に合併しまして、その前は旧浜岡町ということで、それ以後、旧御前崎町の方へ入りましたのですけれども……

中村コーディネーター 旧浜岡というのは、100%だったんです、そうですね。全戸にケーブルを引いたんですよ。

大澤（尚）氏 100%近いのだと思います。

中村コーディネーター 今は、新御前崎になったということで。

碧海委員 そうすると、自治体からの情報は、そのケーブルテレビジョンに個別に。

大澤（尚）氏 いや、申しわけないですけども、私はケーブルテレビを見ていないので、申し上げられませんが、

碧海委員 では、やはり１００％ではないですね。

中村コーディネーター だから、新しい今の御前崎になってからは、まだ１００％ではないんじゃないですか。

でも、先ほどからケーブルテレビに言及された例が多かったので、本当にケーブルで、もちろんインターネットもできるし、あるいは電話もやっていらっしゃるのかもしれないけれども、非常に情報源としては、こちらではＣＡＴＶというのが重要な役割なんだなというのは感じましたね。

というあたりで、ちょっと休憩をとっていいですか。予定が……

碧海委員 すみません、最後の質問だけ。

中村コーディネーター 何だっけ。

碧海委員 損害保険。

大澤（尚）氏 損害保険の関係ですか。これも、地震保険というのは確かにあります。多分、ほかの全国よりも、静岡県は地震保険の加入率が高いと思います。

けれども、非常に地震保険自体が、通常の火災保険よりも高いし、あと、損害額が火災保険のたしか２分の１ということで、そんなに、２割程度じゃないかなという気がしていますけれども。

碧海委員 だから、そんなに皆さんの関心は、保険に関して高くないということですね。

大澤（尚）氏 そうですね、はい。

碧海委員 わかりました。

増田（勲）氏 すみません。私、ＪＡにいますので、いいですか。

ＪＡでは、地震の関係する建物更生共済と、そういったものを勧めております。それで、組合の方は、ほとんど加入されているんじゃないかと思います。ですから、関心がないということはないと思います。一般の方、組合員外の方にもお勧めはもちろんしておりますので、員外の方も納得できれば加入していると、こういう感じです。

中村コーディネーター ＪＡで、耐震建築に改築するとか新築するいうときに、例えばローンの優遇措置があるとか、そんなものもあるんですか。そこまではないですか。

増田（勲）氏 ちょっと私、その貸し付けの方はよくわかりませんが、いずれにしましても、やはり建物更生共済、建更と言っていますが、それには加入をするということを条

件というか、あるいはそれに近い状態というか、そういう形でお勧めしながら安全確保して貸し付けをすると、そういったことはあるかと思います。

中村コーディネーター すみません、いろいろなことをお聞きして。ありがとうございました。

では、予定全体はおくれぎみなんですけれども、ここで第1部を終わらせていただきまして、休憩をとらせていただきます。

第2部の方は、主に会場にお越しいただいた皆さんから挙手でご発言をいただきたいというふうに思っております。

お手洗いの数が限られているので、休憩時間が難しいんですけれども、一応、3時55分ぐらいには再開したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、休憩をとらせていただきます。

第1部の発言者の皆さん、どうもありがとうございました。

「第11回市民参加懇談会」 第2部 議事録

日 時 : 平成17年10月5日(水) 13:30～17:05

会 場 : 静岡県御前崎市 新野公民館

事務局 それでは、お時間になりましたので、再開させていただきます。

会場の皆様からご意見をお伺いしたいと存じます。

ご発言をご希望される方は、挙手いただければ司会がご指名いたしますので、ご足労ですが、お近くのマイクのところまで来ていただき、ご発言を頂戴したいと存じます。その際には、お名前とどちらからお見えか、また、できましたらご職業を頂戴したいと存じます。

なお、多くの方々のご意見をお伺いするために、ご発言は3分を目処に簡潔にお願いしたいと存じます。ご発言が3分を経過したところで、鈴で合図をさせていただきます。

それでは、これから先も引き続き、中村浩美委員、よろしくお願いいたします。

中村コーディネーター お待たせいたしました。やはり、予想どおりトイレが大変だったみたいで、5分ほど遅くなってしまいました、第2部を始めさせていただきます。

第2部は、会場の皆さんからのご意見をいただきます。

もう1時間ちょっとの時間ですけれども、なるべくたくさんの方からいろいろな声をお聞きしたいと思うものですから、ご発言は簡潔にお願いできれば幸いです。

4カ所にマイクがございますので、恐れ入りますが、そこまでおいでいただいてご発言をお願いします。

それでは、挙手なさってください。私が指名させていただきます。どうぞ、ご意見のある方。

真正面というのは、得ですね。一番、目につきますね。では、まず私の正面の男性からお願いします。

参加者(加藤) 早速のご指名、ありがとうございます。

「なぜこんな場所に原発をつくったのか」。

中村コーディネーター すみません、お名前と……

参加者(加藤) はい。これは冒頭の言葉でございます。

私は、静岡県三島市から参りました、原発震災を防ぐ風下の会というところに所属して、東海地震が起きるまでは浜岡原発をとめていただきたい、そういう活動をしている団体の



者でございます。

冒頭、私が申しましたこの言葉です。「なぜこんな場所に原発をつくったのか」。これは、私どもの会が、三島市で4月に1,200人の方を集めまして、三島市民文化会館というところで前地震予知連会長の茂木清夫先生をお呼びした会場で、茂木先生がおっしゃった言葉です。「なぜこんな場所に原発をつくったのか」。つまり、東海地震の想定震源域のど真ん中に、何でこんな危ないものがあるんだろうと先生はおっしゃったわけであり

ます。

その1年前に、石橋克彦先生の講演会も、私どもの会で1,000人を集めて三島で開催いたしました。その席上でも、石橋先生は同じようなことをおっしゃいました。東海地震に関して言えば、このお2人はもう日本では間違いなく1位、2位を争う先生方でございます。今日お越しの皆様には、ぜひこのような地震の専門家、日本でも指折り数えるほどの専門家の皆さんが、「これは危ない」と思っていられっしやということだけはぜひ覚えていただいて、帰っていただきたいと思います。

先ほど、こちらのお席の方で、詳しいことはわからないけれども、もらえるお金は幾らでも欲しいとか、中電が安全だと言うから安全ではないでしょうかというようなご発言が相次ぎましたけれども、実はこれはこちらにお住まいの大部分の方の本音ではないかと思

います。中電さんのご説明でも、「100%東海地震が来ても安全です」と胸を張って答えられる。しかし、そろそろそういった神がかり的な根拠のない自信を持つのはやめていただ

いて、もう少しお互いに科学的な議論、討論ができたならないつも思っております。

ですから、このような場をつくっていただいた皆様のご苦勞には敬意を表しますけれども、今後につま

まして、ぜひ東海地震とそれに対する浜岡原発の安全性、そういったものに非常に県民は、御前崎の皆さんだけではなく、県民は非常に注目しております。ぜひそ

ういった専門家を交えた討論の場をつくっていただけたらと思います。

例えば、地震学者、地質学者、建築の専門家、そういった賛成派、反対派の方がそれぞれ

そういった方々をお呼びして、皆さんの前で討論する。その中で、双方の意見を聞いて、市民の皆様が自分たちで判断する、そういった機会が持てたらと期待しております。

ありがとうございます。

中村コーディネーター　それで、最初に申し上げましたけれども、本日の議事録は全部公開されますので、すみません、お名前をまだ伺っていません。三島からおいでの……。

参加者（加藤）　はい、三島から来ました加藤健一と申します。

中村コーディネーター 加藤さん。ありがとうございました。

続いて、ではそちらの女性に今度は参ります。

参加者（塚本） 藤枝市から来ました塚本と申します。職業は主婦です。

藤枝市というのは、ここからおよそ30キロ離れた東の方なんですけれども、原発事故が起こった場合のことを考えますと、情報を享受する権利は十分にあると日ごろ思っております。チェルノブイリ級の事故が起こった場合には、藤枝市だけでなく全県下、いえ、もっと広い範囲で、いわゆる原発現地という定義がよくわかりませんけれども、私は自分の住んでいるところが原発現地であるという認識で日々暮らしております。

先日、中部電力が、先ほど来お話がありましたように、プルサーマルの導入の発表をしました。非常にその発表の仕方は一方的で、住民や県民の意見を聞くというような姿勢は全くなく、本当に一方的に通告したという感じでした。

それに対して、今日は委員会の方や安全委員会の方は都心の方からお越しでしょうけれども、私たち静岡県民は、東海地震に対して非常に不安を感じて毎日を過ごしているわけです。そういう中で、今回のように一方的にそうした発表をし、またもう一つ驚いたことは、御前崎の市長さんがマスコミの前で、「地震とプルサーマルは関係がない」とおっしゃったんです。これには私もびっくりしまして、関係がないどころか、恐らく市長さんは、いわゆる中部電力の言う、限界地震に耐えられるように原子炉はつくってあるから、その中で多少燃料が違ったものを燃やしても大丈夫だろうという意味でおっしゃったんでしょうけれども、余りにもそれはアバウトで安直な考え方だと私は思いました。少なくとも、住民の命や財産を守るべき立場の首長ともあろう方の発言とは思えなく、ますます不安に感じました。

それで、お願いなんですけれども、とにかくいわゆる国の原子力政策であるとか、あるいは企業利益であるとか、そういう問題の前に、住民や県民、国民の安全や安心を第一に考えた政策を今後検討していただきたくお願いいたします。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございます。

お2方ともご意見として伺いましたんですが、三島と藤枝の方だったので、やはり御前崎の方を優先したいと思うので、御前崎の方、手を挙げてください。

では、そちらのネクタイの眼鏡をかけていらっしゃる方。 では、次にします。同じような感じだったんですね。失礼しました。

参加者（平林） 佐倉の平林です。

これは、吉岡先生にお伺いしますけれども、先生は、平成１６年１０月の新計画策定会議の席上、核燃料サイクル・バックエンド、いわゆる原子力発電所で発電後の工程のことなんですけれども、この政策の審議の席上、再処理は事業所の判断でということを提案していますね。この辺のいきさつ、内容をお聞きしたいと思います。

それから２点目は、今、５年に１度の基本方針の見直しで、ちょうどことし、２００５年は見直しの年に入ったということで、新計画策定会議は今まで以上にやり方を変えたということで、例えば原子力委員の皆様のほかに、地方自治体、それから市民団体、それからＮＧＯの代表、こういう方も参加したようなんですけれども、その中で核燃料サイクル政策をとった場合、将来のシナリオ、これが３つほどあると思うんですよね。これについて、原子力委員会でいろいろ審議した結果、メリットとデメリットを出して、その中で現在の核燃料サイクル政策をとるということを判断したようなんですけれども、この辺のお話も、原子力委員の方からお聞きしたいと思います。

以上です。

中村コーディネーター 今日、「知りたい情報は届いていますか」なんです、平林さんにとっては吉岡さんの発言が知りたい情報だったみたいですから、簡潔にお答えください。

それから政策的なものは、木元座長の方から多分お話しできると思います。

吉岡さん、どうぞ。

吉岡委員 簡潔にお答えします。

私の観点では、再処理事業というのは財務リスクが非常に高い、電力会社にとってはリスクな事業であります。しかも、現在、プルトニウムは４０トンぐらい余っている。私の概算では２０年ぐらいもつ在庫と認識しておりますけれども、これだけあるのにわざわざ経営・財務リスクの高いものを電力会社がやるだろうかということは、非常に甚だ不可解なことであって、かつ、事故や環境汚染の危険もあるし、核不拡散への悪影響も予想される。こういう無意味な事業を、果たして電力会社がなぜやるんだろうということを前々から思っておりまして、本気でやりたいのかどうかというのが疑わしい。それならば電力会社が、国策とかそういうものにとらわれず、財務リスクを全部引き受ける形で、今、六ヶ所工場を動かすか、それとも無期凍結するか、ほかの選択肢もあると思いますけれども、そういうことを自分がすべてのリスクを引き受け、自己決定、自己責任の原則に則って行

動すればいいではないか、そうすれば正しい答えが出るのではないかと思います。そういう趣旨から事業者の判断に任せる。例えば中電と関電の判断が異なってもそれは構わない。原発そのものについても、私は同じことを主張してまいりました。国は、規制と誘導はできるけれども、指導はできないという、そういう立場です。

中村コーディネーター というのが、吉岡さんの考えです。

では、木元座長、お願いします。

木元座長 ありがとうございます。座ったままでいきますけれども、本当は委員長にお答えいただいた方がいいと思うんですけれども、簡単に今のお答えだけさせていただきます。

おっしゃったように、昨年から策定会議を開催いたしまして、延べ33回、32人の委員で検討いたしました。このコアメンバーの中でも、吉岡先生も、井上チイ子さんもメンバーです。いろいろな方が入ってくださいまして、いろいろな議論を行いまして、当初、5年ごとの見直しで、今までの「原子力長期計画」だったんですが、「長期計画」をやめて「大綱」という形にしております。これは一つの新しい意味で、新しい視点で原子力政策というものを考えようという意気込みも入っております。

一番最初にやりましたのは、当時、核燃料サイクルをどうするかといういろいろなご議論がありまして、これはお金がかかりすぎるのではないかと、再処理をするのに日本はふさわしくないのではないかと、いろいろなご意見がありました。特に、19兆円お金がかかるかという経済性の問題が随分論議されました。

そこで、最初から、では核燃料サイクルから審議してみようじゃないか。日本はどういう政策をとったらいいのか。いわゆるワンス・スルーという、使用済燃料を、それで終わりとして、どこかに地層処分する。この方法をとるのか、それとも最初に目指したように、再処理をしてウランとプルトニウムを取り出し、MOX燃料を作り、使用し、最終的には高速増殖炉まで行くという路線をとるのか、この辺を、原点からトレースしようということで、本当にゼロからやりました。

それはどういうことかといいますと、まず4つのシナリオをつくったわけです。1つは、現状で考えている全量再処理ですが、日本で再処理できる量、今800トンぐらい再処理できるんですけれども、使用済燃料を、できる限り800トンを再処理して、ウラン、プルトニウムと分けて、あとでMOXなりなんなりにするわけですが、それをやりましょうと。できない分は、できるまで中間貯蔵する。ですけれども、このシナリオはあくまでも

全面的にこれは再処理をする。そういう方向です。

もう一つは、800トンしか再処理できないならば、800トンだけ再処理すればいいじゃないか。あと残ったのは、直接処分したらどうかと。これが2つ目です。

それから3つ目は、いやいや、再処理はやめようと。本当に使用済燃料は、そのまま地層処分するという方法にしよう、再処理をしないという方向。

それから4つ目、これはモラトリアム的なんですけれども、今これを検討してどちらかこっちかと決めるのはやめようと。当面、中間貯蔵して、そして後で適当な時期になったらこれを再処理するか直接処分するか、そう決めてもいいじゃないかということです。

この4つのシナリオの中では、随分ご議論がありました。日本では、再処理をするということが固まっておりましたので、その事業に携わっていらっしゃる方々、電気事業者の方々を初めとしていろいろなお考えの方々が、4つ目のモラトリアム的シナリオに対しても異論がございました。でも、あえてそれをやりまして、10の項目をつくって、経済性の問題、それからエネルギーセキュリティの問題、安全性の問題、いろいろなものやって、それを検討させていただきました。

このうち経済性については、6回、検討委員会を特別につくってやりまして、それを策定会議にもご報告して結論を得たということですが、1つ目のシナリオ、日本でできるところは再処理しましょうと。そして、できないものは中間貯蔵しておいて、いずれ全量再処理という方向に行きましょうという方向が固まったんですね。そういうような検討の時間を込めて、そして今の大綱案ができ上がって、33回目の委員会で策定会議委員の方にご納得いただきました。今、インターネットで、それがご覧になれると思います。今は案ですけれども、そのうちちゃんとしたまとめとして、「大綱」ができ上がると思います。

それぐらいでよろしいでしょうか。あと細かいことになれば、資料がございますので、ご説明を後でさせていただきます。

中村コーディネーター 余り説明が長くなっても、今日は趣旨が皆さんのご意見を伺うことなので、これぐらいで。あとは、資料をまた入手される方法はございます。

それで、先ほど指名申し上げました方、どうぞ。

参加者（下村） 御前崎市御前崎から来ました下村といいます。ふだんは、静岡大学に勤めております。

私は、情報という点に限って、今回お話ししたいと思うんですけれども、一番不足していることというのは、恐らく、いざ非常に大変な事態が起きたときにどうしたらいいかと

というのが、住民が全くわかっていないという点だと思います。実際、例えば小さな原子炉とは関係ない場所で火災が起きたような現象というのは、我々、実際に体験しているわけですが、家にいると、各家庭に配られているスピーカーから音が鳴りまして、向こうもあたふたしている様子がわかるんです。実際、もし今ここで電気がバチッと消えて、ぐらぐらっときて、では皆さんどうしますかといった場合に、みんなどうしたらいいかわからないんじゃないかと思うんですよ。それは、非常にリスクが高いのではないかと思います。

つまり、住民の方たちは、中部電力からいつも、「中部電力は安全です、安全です」ということをずっと繰り返し聞かされております。したがって、安全だと思い込んでいるんですよね。それで、いざというときのための処置が全くないんですよ。そこは、ぜひ指摘して、地震の防災をこれだけしているわけですから、原子力防災に関しても、もう少し住民にアピールする必要があるのではないかと思います。そうしたことが、実際のリスク管理にもつながると思いますし、本当にプルサーマルはいいのか、その辺の話にも多分つながっていくと思いますので、そういった危機管理という意味で、もう少し中部電力以外のところからプレッシャーをかけていただきたいと思います。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございます。非常によくわかりました。

それでは、続いてこちらの男性にしましょうか。

参加者（澤入） 御前崎市御前崎に従事している者でございます。職業は、観光業をしております。澤入と申します。

今日は、静岡県最南端御前崎へ、原子力委員の皆さん、ようこそお越しくださいました。特に木元さん、お忙しい中を、テレビで見るよりはるかに美人で、美しいと思います。私どもの地元からは、加藤剛が御前崎町の出身ですので、またお会いしたらぜひ。

ということで、今度は本題に入ります。時間がございませんので。

原子力は今、世界で430基ございますね。それで、日本は53基ということで、1960年からもうヨーロッパでは35基、プルサーマルを使用しています。そういうことで、もう先輩のヨーロッパでは随分たくさんのお話をしておりますので、ぜひ中部電力さん初め、そして委員の皆さんも、そちらへ行っているいろいろな話を聞いて、ぜひその安全性を確認した上で、中部電力さんも新しい4号機でやるということを聞いておりますので、その方向へ向かってやっていただきたいと。

ついては、今日はウィークデーでございますが、やはりお若い方、ということはお勤めですね。そういう方にも、やはりそういう時間を設けていただいて、市民並びに隣接の皆さんが納得の上で営業していただきたいと、そういうように考えております。

前に、42年にこの発電所の話があったときに、漁業者の皆さん初め旧御前崎町は、魚に明けて魚に暮れる町でございまして、もう魚なしではいられない。魚をとること、それをとることができなくなったら大変だということで、大変な大騒ぎをしたんです。そして、その当時、成田空港が例のデモ行進、物すごい戦争みたいな闘いをやりましたね。そういう方々がお見えになりました。でも、御前崎町の皆さんは、そういう方は来るだけだと。歴史のある御前崎は、住民自分たちで受け入れするかしないか決めましょうと。そういうような先輩の皆さんが納得して、住民も納得して、隣接の御前崎町はオーケーを出したわけでございます。今回もそういうような形で、皆さんにお互いに納得した上で受け入れ体制を整えていただきたいと思います。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございます。

それでは、続いてこちらの女性に参りましょう。

参加者（鴨川） 御前崎市浜岡地区の鴨川と申します。

私たちは、全く浜岡原発の東隣に住んでおりまして、大体1キロ以内、600メートルから650メートルのところに住んでおります。小学校低学年から90歳ぐらいのお年寄りまで、30名余がここで毎日暮らしております。150号線の南にありまして、世間の方からは、「あの人たちは敷地の中に住んでいる」と言われておりますが、実は言い伝えによりますと、私たちは300年ほど前からそこに住んでおります。したがって、私たちの方が先に住んでいるわけです。

それで、若い40代の父親たちですけれども、もうここで子供たちを育てたくないという声があります。お母さんたちは、皆さんどう思われるのでしょうか。それと、私たちがこれほどの至近距離に住んでいるということ、この情報を皆さんはご存じでしょうか。

1つ提案したいのですが、これは目に見える安全対策ということをお願いしたいと思います。それはどういうことかと申しますと、1999年11月26日、朝日新聞「論壇」というところに、当時、成蹊大学名誉教授でいらっしゃった 今もそうかもしれませんけれども、失礼いたしますが、黒沼教授という方だったと思います。タイトルが、「幻の原子力都市計画法に学べ」というものです。これは、恐らくパソコンで検索していただい

れば出てくるかと思われしますので、詳しくは申しません。その要綱というのが、1959年、科学技術庁が作成したものであるけれども、残念ながら日の目を見なかったということが書いてあります。このときの科学技術庁長官は、中曽根康弘氏だそうです。

その中で氏が述べておられるのは、事後対策ではなくて事前対策をとということを述べておられるそうですので、ぜひこの法律を まだ法律ではないんですけども、これをぜひ制定していただきたいと思います。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございます。事後対策より事前対策ということですね。

では、続いてこちらの方。今、紙を挙げられた男性、どうぞ。

参加者（増田） 牧ノ原市というのが今度できるので、そこから来ました増田勝という者です。牧ノ原台地でお茶をつくっている百姓です。

2つ言わせてもらいますけれども、まず1つ、ここ御前崎市なんですけれども、御前崎町と浜岡町が合併してなったんですけれども、浜岡市にはなかったんです。それはなぜかという、浜岡原発があるからと。合併して御前崎市になったんですけれども、御前崎原発にはなかったんです。なぜかという、僕はお茶農家ですから、浜岡茶では売れないんです。御前崎茶、牧ノ原茶なら売れるんです。そういうことをわかってもらって、ですから原発というのが、僕らが思っている以上に、世間ではすごく不安を持っていると。

静岡県では、地震の問題がすごく多いです。東京から来た方は知らないと思うんですけども、1週間に1回、NHKのニュース、テレビの天気予報で、今週の地震というのがあるんです。今週の地震は、ここここに起こりましたということで。ですから、東京でオキシダント濃度が幾つとか、光化学スモッグの予報がありますね。それと同じように、静岡新聞なんかでは、1面を使いまして今週の地震ということであるんです。それだけ私たちは、地震について心配なんです。

それでありながら、中電さんは今回プルサーマルをやると言っている。そのギャップというのが、すごく大きいんですよ。確かに推進の方が、お金が欲しいからなんでしょうけれども、ぜひそういうのをやрьてくださいと言うのはわかりますけれども、そのギャップというのがすごく多いので、それを考えてもらいたいと思います。

それともう一つ、こういうことがありながら、中電さんは10月1日から、1リットル以上漏れないと情報公開しないんです。1リットル以下、例えばコップ1杯漏れたら、ホ



ームページに出さないと10月1日からなったんです。それで、3年前からは、たしかホームページには出すけれども、プレス発表はしないというふうになっているんです。

今、情報を公開しなきゃならないという流れがありながら、そういうものに中電さんというのは、ますます後退、後退というふうになっているので、ぜひそういうものも原子力委員会の先生方に、「中電さん、それはおかしいよ。みんな1週間に1回、静岡新聞では1面で地震情報というのを流しているんだから、中電さんもぜひ情報公開の観点としてそういうことをやってくださいよ」ということを、ぜひ中電さんに言ってください。

木元座長 コップ1杯って、何がコップ1杯？

参加者（増田） 例えば、配管からコップ1杯、水が……

木元座長 水漏れですね。

参加者（増田） 例えば、コップ1杯というと、大体200ccですね。200cc漏れた場合には発表しないんです。それが1リットル漏れると発表するんです。そういう基準を、勝手に10月1日からつくったんです。ですから、今日、もしかしたら今コップ1杯の水がポチャポチャ漏れているかもしれませんが、それだったら、今までは発表したんですけれども、それが10月1日から発表しないということになっちゃって、「それはちょっとおかしいんじゃないの」と何度も言っているんですけれども、聞いてくれないので、ぜひ以前のようにプレス発表もしてもらって、確かにインターネットでパソコンになっているんですけれども、パソコンのない方もおりますので、ぜひプレスに発表してもらって、小さい事故でもふぐあいでもいいですから発表してもらって、それをどうするかというのはマスコミさんが、いや、これは大事だから発表しよう、これは大丈夫じゃないから発表しないと、それはいいと思うんですよ。でも、隠すことはないと思うので、ぜひそのことを中電さんにお伝えください。よろしくお願いします。

木元座長 わかりました。

中村コーディネーター ありがとうございます。

それでは、眼鏡を挙げていらっしゃるお父さんです。お願いします。

参加者（長野） 私は、御前崎市ではないですが、直線距離で8.5ないし9キロに住んでおります、相良町の長野栄一と申します。

時間が制限されるとなんですから、先にこれを公開するわけですが、先ほど大澤さんがおっしゃったプルサーマルの説明の新聞報道ですが、これが地域の静岡新聞にきのう出た記事です。それから、これが毎日新聞のけさの記事です。ここには、「中部

電力 説明公開で“さくら”としてあります。やらせもいいところです。中部電力の体質は、こういうところから進んでいます。

では、本論に戻ります。

せっかくの機会ですから、原発震災の問題とプルサーマルの問題をかいつまんで話させていただきます。

私は、先ほど言いました8.5キロぐらいの直線距離にありますが、ここの新野の隣の旧小笠町の平川という部落は、昭和19年12月に東南海地震がありまして、これで静岡県でも非常に被害の多いところでありまして、数軒の方が残っただけで、あと部落が全滅したというようなことを、この間、元の黒田町長に伺いました。そういうような非常に地震のひどいところでございます。それに隣接した浜岡町の浜岡原発ということは、私ども、常に心配しておりまして、いつ地震が来てどのような被害があるかということで、ひやひやしております。

それで、先ほどもお話がありました茂木先生の地震に関するお話も聞きました。それから、石橋先生が2年ばかり前にお隣へ来まして、原発震災の話をされました。

ところが、現在の溝上恵先生ですか、判定会の会長をなさっている、あの方が静岡で地震の話をされました。そのときに、私どもが質問をしまして、「先生、浜岡原発があるけれども、どんなふうですか」と質問したら、「私は地震の問題は専門だけれども、原発の問題は専門じゃないからお話はできない」というようなことを言われました。

ところが、石橋先生が2年ばかり前にこのお隣に来たときには、地震学者が原発震災を云々しないというのは欺瞞だということをおっしゃいました。我々素人は、原発震災といってもわからないけれども、少なくとも地震学者なら、我々よりも知っているわけだと私は思っております。だから、賛成とか反対とかということを通り越して、原発がどのくらいに耐えられるかということをとことん論議していただきたいと思います。中電は、「安全だ、安全だ」と言うけれども、私どもは決して中電を信用しておりません。我々の納得のいくようなお話をしていただきたいと思います。

あと、プルサーマルのことがあるので、かいつまんでやらせてください。

中村コーディネーター はい。なるべく短くお願いしますね。

参加者（長野） プルサーマルの問題を、今、町内で歩いています。それで、私どもが調べた範囲では、かいつまんで箇条書き的に言いますけれども、プルトニウムは自然界に現存なくて、人類の最大の毒薬であるというようなことを聞いております。1グラムで

何万人の人が肺がんになるというようなことを聞いております。それが、2には燃料が壊れやすい、それから制御棒の効きが悪い、核反応がより不安定である、事故の被害が大きくなる、労働被ばくが増える、こういうことを私どもは関係のところで勉強させていただいています。

ところが、今、浜岡の中電の社員が歩いているところだと、こういうようなものを持って歩いているんですね。ところが、今、私の言ったのと、全然反対のことを言っています。マイナスを1つも言っていない。そこら辺が、やはり情報公開で一番主なことです。ひとつよろしくをお願いします。

中村コーディネーター わかりました。ちょっと長くなりましたけれどもね。

今、プルサーマルの問題というのは、中電もそうですし、我々はこの間、福岡へ行ったんですけども、九州電力の玄海でも話題になっているんですが、確かにその安全性というのは、真っ向から対立する見解というのが現存しています。ですから、それは住民の皆さんが納得するためには、やはり討論会をやるとか、多分、単なる国の説明、あるいは電力さんの説明だけでは済まないというところに来ているのではないかなという印象は我々も持っています。

ただ、市民参加懇談会は、多分その討論会をやることはできないので、我々の役目ではないんですけども、安全性については本当に住民の皆さんが判断できるような情報をしっかり公開する、その方向が討論会になるのか、どういう形になるのかは、それぞれの地域でまた決めればいいと思うんですけども、そういうことが必要だなというのは、我々も全国を歩きながら、今感じているところは事実ですね。

あと、今日のテーマに沿って、なるべく御前崎の皆さんから、我々としてはご意見を伺って帰りたいと思うので、さらにご発言をいただきたいと思いますが。

すみません、後ろに気がつかなくて。では、そちらの女性、どうぞ。

参加者（鈴木） こんにちは。御前崎ではなくて、2つ隣の吉田町から来た鈴木末起子という者です。会社員で、中学1年の女兒を持つ母親です。

去年は、国際テロとか東海沖地震が間近に迫っているとかということで、原発にもし何かがあって放射能漏れしたとき、自分はどう動いたらいいかという疑問を持ちまして、自分なりに情報をいろいろ集めて、どういうふうに行動すべきかと考えました。そのときに、一番最初にわかったことは、地震防災のときには、一番最初に家の中から外へ出られるように戸や窓をあけるということです。放射能防災のときにまず何をするか。一番最初にす

るのは、放射能が入らないように窓を閉める。外に出てはいけない。

では、私たちは東海地震が来たときに、放射能漏れがあるかないかということがはっきりするまでどういうふうに行動したらいいんでしょうか。地震が来て、外にみんなで避難します。それで放射能漏れが一切ありませんという情報が届くまで、ずっと外にいないといけないんですか。それとも、放射能が漏れているかもしれないから、揺れがおさまったら家の中に戻って全部窓を閉めなきゃいけないのか。でも、家が壊れるかもしれない。その情報は、いつ、どうやって手に入れることができるんでしょうか。

放射能漏れがあるかないかというのは、どうやって知ったらいいかということで、吉田町役場に問い合わせました。放射能漏れがあった場合には、どのような基準で警報を出してくれるんですかと問いましたら、原子力災害対策特別措置法により、原子力事業者の原子力防災管理者が、異常が発生した場合には15分以内を目安に国・県・関係市町村へ報告することになっていると。15分を目安にということです。吉田町は20キロ離れていますから、15分でもぎりぎり間に合いますけれども、地元の人たちは間に合わないと思います。

地震防災は、非常によく静岡県は行っております。年に1度は大々的な規模でやっております。

しかし、今まで、放射能防災は訓練されたことがありません。ですので、一般市民は放射能が漏れたときに、放射能が入らないように窓を閉めなきゃいけないということも知りません。これは、情報を知らないということです。このことを、よろしくお願ひしたいと思います。

中村コーディネーター 伺っておきます。

本当に、御前崎の方を優先したいんですけれども、御前崎の方でご意見のある方。

(「御前崎だけっておかしいぞ」「御前崎ばかりはおかしいよ」と呼ぶ者あり)

中村コーディネーター 今日は、だって御前崎で開催しているんですから。御前崎の人だけと言っているわけじゃないですよ。

(「事故は御前崎だけで起きるのか」と呼ぶ者あり)

中村コーディネーター そういうことじゃありません。そういう不規則発言は困りますね。ちゃんとみんなで話をしようとしているんですから。

今、こちらで手を挙げられた方、どうぞ。

参加者(増田) 御前崎市御前崎の増田でございます。

いろいろ聞いておりますと、何か、よその方の衆が、反対意見が多いので、私は賛成意見を述べさせていただきます。

（「賛成反対の討論会じゃないんだよ」と呼ぶ者あり）

参加者（増田） はいはい、わかりました。

中村コーディネーター あくまでも、討論会じゃないですからね。

参加者（増田） はい。

原発ができて29年間、これといった事故もなく過ぎてきたということは、非常に貴重な件だと思います。チェルノブイリなんかは、レベル7とかといって非常に大きいですが、浜岡原発はレベル1とか2。先ほど、そちらさんで何だか小さい火事のようなことを言いましたが、あれなんか、ほんのレベル1にもならぬ、0.1ぐらいなんですよ。そんなことを言っていて、日本のエネルギー問題が解決できますか。私は、それを非常に腹立たしく思います。

本当に、国・県が保証してくれれば、地震の大きい問題もあります。そういう面も保証してくれれば、別にプルサーマルですか、これは2010年から使用するという、それにも私は賛成でございます。

先ほど、山下さんがおっしゃいましたが、非常にシンプルで簡単に申し述べましたが、一般御前崎の住民としましては、その件においては非常に、私らもそうですが、もともと船乗りで長く船に乗っておりましたので、細かいそういう専門的なことはわかりません。

ですけれども、日本のエネルギー問題を考えたら、これはぜひプルサーマルもやっていただきたいと思いますし、先ほど澤入さんの話でも、ヨーロッパでは35基とかといって、既に使用されているわけですよ。ですから、問題はないのではないかなと思います。

プルサーマル、賛成です。以上です。

中村コーディネーター ありがとうございます。

ご意見は結構なんですけれども、今日のテーマの「知りたい情報は届いていますか」という原点に戻って、ぜひ皆様のご意見をお聞かせいただきたいと思います。

それでは、ブルーのシャツの方。

参加者（布施） 今日の趣旨は、「「知りたい情報は届いていますか」～これまでと、これから～」ということが主なんです。皆さんの今日お話ししている方々の半分ぐらいは私の感覚ですよ、ちょっとずれがあるのかなというふうに思います。

中村コーディネーター すみません。どちらからおいでのどなた様でしょう。

参加者（布施） 隣の大東町。勤めは浜岡町。24時間この近辺にいるという人間でございます。布施と申します。

それで、「知りたい情報は届いていますか」ということなんですけれども、まず情報ということをよく考えてみますと、我々が情報を一番知りたいのは何かというと、安全・安心なわけですね。そういう情報を、特に一番日ごろ知りたいというふうに思っているわけです。今の言葉で言うと、スーパーなんかでお魚とか野菜とか、その他いろいろ売っています。あれには、トレーサビリティといって、前どうだったのか、これから人間が食べて大丈夫なのか、賞味期限などが書いてあります。料理のことも、むしろ書いてあります。

ですから、今回、仮に事故が起こったとしても、その事故は過去どうであって、今回こうなりました。だけれども、対策をこれこれこういうふうにします。ですから、向こう何年まで安全で、向こう何年来たら直ちに点検をしますというような情報が来たならば、私たちは非常に、その1つの事故に対しては安心感が生まれます。それが、今言ったトレーサビリティです。それは、食と同じです。

もう一つは、比較です。物の比較。この比較というのは、今、放射能が浜岡、大東町のどこどこ、どこは幾らと言っています。だけれども、その値は、中電なり国が決めたそういうもので、5倍安全ですとか、20倍安全ですとかと言っています。

だけれども、我々がもうちょっと簡単に知りたいのは、我々と同じ中部電力を使って、同じような環境にある三重県。三重県は海もあり、中部電力です。同じです。その放射能はこの浜岡町と比べてどうなのか、ここがわかれば我々は安心するわけです。そういう情報がなくて、わけのわからないと言ったらちょっと語弊がありますがけれども、非常に細かい我々としてはわからない数字をばらばら出されても、ちっとも安全・安心は我々にはわいてこないわけです。それよりも、同県の三重県はどうだったということがあれば、あそこは何もないわけです、今は。ちょっと計画があるようですが、ないわけです。それがこうだから安全だよというのであれば、かなり安心度が増します。

そういうことで、知りたい情報ということをよく考えてみますと、そこがポイントじゃないかと。反対だのなんだのがんがん言うのは、それからだというふうに私は思っています。今、もうできちゃっているんですから、それに対して、やっぱり知る権利が当然あって、その知る権利を詰めていくと、我々が安心するのはそういうことじゃないかなということで、終わります。そういうことをよろしくお願いします。

中村コーディネーター ありがとうございました。

では、まだ時間がありますね。大丈夫ですね。もう少し伺いましょう。

紙を持ち上げられたジャケットをお召しの男性。

参加者（玉置） 私も御前崎じゃないんですけれども、三島から来ました玉置と申します。サラリーマンで技術屋です。

皆さんの話を聞いていて、やはり今回多いのは、地震と原発と。結局、そういう情報が我々の方に届いていないから、こういう話がたくさん出てくるんじゃないかな、あるいは不安じゃないかなと皆さんが感じておられるように思います。地震は地震、原発は原発と、要は情報が完全に乖離していたと。それをやっぱり1つにした、そういう議論なり情報なりが市民の方に流れてくれば、我々もその内容を判断することによって安心感を持てるということになるんじゃないかなというぐあいに思います。

それから、例えば、具体的な話なんですけれども、今年の春に、内部告発と言っていいかどうか分かりませんが、要は、昔、原発の内部設計をやっていた人が、実は浜岡原発は地震にはもたないんだと。地盤の強度の数字を丸めて持つことにしたんだと、そういうような話をされました。

そういうことに対して、記者会見をされたんですけれども、午前中に記者会見をされて、午後に中部電力に行くと、「いや、大丈夫なんです」と。だけれども、そういう話は、本当は1時間、2時間で検討して答えられる話ではない。ところが、要は安全だと言っておけばいいという姿勢が、中部電力に見られると。そうじゃなしに、やはり真摯に内部資料、何十年か前の資料になるかもわかりませんが、そういう資料をきちっと検討して、実はこうこうこういう具体的な数字をもってこうやりました。こういう数字の設計でもってこうやったんだから安全ですと、そういうような回答をいただければ、我々としては安心感が持てるわけなんですけれども、ただ単にM8.5ですか、そういう巨大地震にも耐えられるんだと。だから安全ですということを繰り返して述べられても、我々としては安全な情報としてはとらえることができないわけですね。だから、やはりそういうようなことを、単に中部電力だけに任せるのではなしに、そういうことがあった場合に、やはり行政とか政府の方からそういうことをサポートするような情報を流していただく、そういうシステム化が必要じゃないかなと。マスメディアでいろいろ問題が取り上げられますけれども、それは流れっ放しだと。そうじゃなしに、それに対してきちっと答えていくというシステムが必要じゃないかなと。新しい事実が出たら、そういうことに対してきちっと答えていくと、そういうことが必要じゃないかなと私は感じています。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございました。

まだ後ろの方はいいですか。

では、今度はこちらの、2人とも紙を挙げていらっしゃいますね。順番に行きますね。

それでは、こちらの方から先に。

参加者（竹内） 浜松市から来ました竹内といいます。

中部電力の原子力館に3年ほど前に行ったときに、こういう原子力のQ & Aというのを配っていたんですよ。これは、電気事業連合会が出しています。私は、このQ & Aと、もう1個、中部電力が出したプルサーマルというのがあるんですけども、5つほど問題点を上げて、情報の問題について少し、ぜひ原子力委員会の皆さんにお考えいただきたくて発言させてもらいます。

1点目ですけれども……

（「テーマに合ったことを質問しようね」と呼ぶ者あり）

参加者（竹内） だから、その情報についてなんですけど。

（何事か呼ぶ者あり）

参加者（竹内） 1つ目なんですけれども、「放射線を受けても、子供への遺伝的な影響は見られていない」と書いてあるんです。ほかに、こんなふうに書いてあります。「広島・長崎の原爆により、多量の放射線を受けられた方々などを対象に、多くの調査を行いました。その結果、今までの調査では、子供への遺伝的な影響は見られませんでした」と書いてあるんです。私は、これについて非常に疑問に思っています。

2つ目ですけれども、2つ目は異常事態が起こったときは、国・自治体・電力会社が一体となって迅速に対応すると書いてあるんですけども、実はこれが出た前後ですけども、電力会社の事故隠しとか、あるいはシュラウドのひび割れとか、さまざまな問題が出たんです。それに対して本当に迅速に対応したかということ、私は非常に疑問に思っているのが2つ目なんです。

3つ目なんですけれども、3つ目はまたこんな記述があります。「原子力発電所で働いている人のがんの死亡率は一般の方と変わらない」と書いてあります。原子力発電所の放射線というのは、一般に受ける人の放射線と違うんですよ。違う放射線の状況を見無視して、ただこのグラフだけを書いて、原子力発電所の放射線というのは安全なんだ、働く人には放射線の影響がないんだというふうに電気事業連合会が書いたことに対しては、とり



わけ最初に言いました広島・長崎の放射線について全く影響がないと書いて、実際に地元で宣伝されていることに対して、私は非常に不満といいますかおかしいんじゃないかと思っています。

それからもう2つですけれども、これは中電がそのとき出したパンフレットです。リサイクルが全面なんです。そして、原子燃料もペットボトルもリサイクルなんです。私は、ペットボトルと原子燃料を同列に扱ってキャンペーンするというのは、余りにも納得ができないというふうに、そのとき思いました。そして、これを開きますと「安全性は変わりません」と書いてあるんです。私も、ブルサーマルというのはよくわからなくていろいろ勉強したんですけれども、やはりウィンズケールの周辺でさまざまな核被害がありますし、いろんな汚染もあります。六ヶ所村での汚染も懸念されています。ただ浜岡 御前崎が安心であればいいという問題ではないと思うんです。この核燃サイクルが、この社会にどのような影響をもたらすのか、そういうことを踏まえて、ぜひ原子力委員会の皆さんにはお考えをいただきたいと思います。

私は、今、相当事例を紹介しましたけれども、まだ言いたいことはいろいろあるんです。現場においては、やはりこういう安全とリサイクルと、そして放射線は安全ですという3つの柱の、物すごい情報操作があるように私は思っています。そういう情報操作がぜひないような、そういう社会を原子力委員会の皆さんのお力をもってつくり上げてほしい、私は個人的にはそう思っています。

ありがとうございました。（拍手）

中村コーディネーター ありがとうございました。

何というか、ご意見とか疑問というのも大事なところなんです、今日はあくまでも知りたい情報は本当に届いているかを座長以下、我々聞いて帰りたいと思っているものですから、やっぱりこの原点に立ち返って、ぜひ声をお聞かせいただきたい。だんだん残り時間も少なくなってきましたので、そのテーマに沿ってぜひご発言をいただきたいというふうに思っております。先ほどお2人同時に手を挙げられたので。どうぞ。

参加者（鈴木） 藤枝市から参りました鈴木といいます。

今ブルサーマル問題で、もう既に世界じゅうでやられているような発言がありましたけれども、私はそんなふうに聞いていないんです。ほとんどやめているといったようなことを聞いています。その辺、正確な情報を今後流してもらいたいというふうに思っています。

それから、浜岡原発と地震、切っても切れないというふうに思います。ことしの1月、

中電は、1号、2号今停止をしていますけれども、それに補強工事をやるというふうに言っていました。最初は、中電は350ガルに耐えられる、その次は450、600だと。今度は1,000ガルに耐えるような補強工事をやると言っていました。ところが、具体的内容が伝わってこないんですね、どうやるのか。私が素人的に考えて、1号、2号なんというのは、とてもそんな補強工事はできないと。簡単に言えば、やるならやってみろという感じがするわけですがけれども、そういう具体的な情報を流してもらって本当に地震に耐えられるのかどうか、我々としても検証をしたいというふうに思っております。

それからもう一つは、お金の流れですけれども、私は藤枝市ですから、リスクだけをしてよってメリットは全然ないわけですね。発電の電気を受けているということになれば、それはメリットかもしれませんけれども、そういう意味で、先ほどの発言の中にも、地元の方は交付金があって非常にありがたいという発言がありました。ところが、これは法律に従って交付される交付金ですから、それは公のものとしていいと思います。そのほかに、どこをどう回っているかわかりませんが、いろんなお金が流れているというふうに聞いております、それも半端なお金じゃないと。だから、その辺も中電に情報公開として、ではこの町内会に幾ら払ったのか、今までどのくらい払ってきたのか、みんな電気料金から出ているわけですね。そういうものを公開してもらいたいというふうに思っております。それだけでなく、幾ら何でも不公平だというふうに思っています。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございます。

参加者（東井） 静岡県の東部から来ました東井と申します。

私、実は「浜岡原発を語るかい」の代表をしております、今日こういう場を持ていただくように要請してきた張本人です。ようやく、本当に実現させていただいてありがとうございました。

なぜこういうことを提案したかといいますと、実は阪神の大地震の後に、原子力発電所は地震に大丈夫かという話になって、それで国が見直しをして、大丈夫だという結論が出て、それを皆さんのところに、立地長に説明して回った。福島でやったのも知っていますし、何所か私も行ったこともあります。しかし、静岡県ではやられていなかったと聞いてびっくりしたんです。私は、埼玉から移ってきたものですから、当時は静岡ではありませんでした。

それで、東海地震が言われているのに、なぜ静岡県が外されたんだろうと、今でもこれ

私は聞きたいんですけれども、原子力委員会がお答えすることじゃないから、ずっと疑問に思っているんですよ。本当はそういうことを、専門家の賛否両論ありますから戦わせていただきたいんです、この地でね。その一步になればということが一つと、つまり地震に対して本当に大丈夫なのかという、本当の情報を住民として聞かせてもらって、そしてどうするかということをみんなで検討したいと、対策を考えたいと、これが一つの理由です。

私は静岡県内、全域地元だと思っています、みんなそうなんです。もう一つ言いたいことは、その地元ということに関してです。先ほどから、中村さんが「御前崎市の方」とおっしゃるんですけれども、合併して御前崎市になりましたけれども、今日御前崎市民で発言なさった方は、ほとんどが旧御前崎町の方なんです。旧浜岡町の方はほとんど、ここに出られた方のほかには、多分お1人かお2人かだと思うんですね。つまり、私は自分の意見は今日は言いませんけれども、私は物理とか、子供たちにそういったものを教えてきて、それで絶対にプルトニウムはいけないなと、それからチェルノブイリを起こしてはいけないなということの信念でやっていますので、自分はそのことで一生懸命死ぬまでやりたいと思います。でも、それは反対の人を抹殺することでは全然ないんですよ。反対であればあるほど意見を交わせて、みんなでどうしようかというふうに考えていきたいんですよ。ところが、この町にはそれがない。旧浜岡町にはない、御前崎町にはまだあったんです。そのとおり、今日も旧御前崎町の方は発言なさっています、でも浜岡町にはないんです。地元の方々にご意見聞きましたら、ものが言えないんだと、言いにくいんだと、そういうことでしたので、「そんなことってないでしょう」と木元さんとそこで共鳴して、それでちゃんとものが言えるような町にしましょうということで、こういう場を設定していただいて　でも地元の方、つまり旧浜岡町の方は発言ができない。でも、皆さんにこうして来ていただいて、オープンでやって、私も住民の方で本当に賛成している、今日話してくださった方たちの生に聞いたのは初めてなんですよ、ほとんど初めてなんですね。一堂に会して両方の意見を聞くということが大事だと思うんです。なおかつ聞きっぱなしじゃなくて、話し合いすることが大事だと思うんですね。

ここから先は原子力委員会の問題になりますけれども、原子力委員会にお願いしたいのは、原子力委員会は原子力を進めていくところですよね。責任を持って進めていくとさっきもおっしゃったんですけれども、そのときには何が何でもがむしゃらに進めるということではないと思うんですよ。ですから、そこにいろいろ障害物があったら、それを取り除

く努力をしなければいけないという意味で、そういう意味で、本当にこういうふうな抱えている問題を出して聞いていただいて、それを解決していくにはどこに振っていったらいいか、原子力安全委員会なのか、保安院なのか、そういうことも含めて、そういうふうを受けとめていただきたいと、そういうことなんです。地元というのは、決して旧浜岡町でもなければ御前崎市でもない、隣接町みんなそうですし、県内全部そうです。全部言えば、日本全体もそうなのかもしれません。

そういうことでやっていただきましたけれども、初めてのことで、まだまだとてもかたい感じを私はしております。先ほどの資料なんかもこうして見せていただくと、特に問題なことはないのです、お話のときに必要だった資料なんだから配っていただいたかったなと思いますね。

それで、最後ちょっと悪い紙のアンケートのお願いというのは私、友の会で作って、入り口で配らせていただきました。ぜひ、こういう場をこの町でつくっていききたいということで、ぜひお帰りにアンケートをいただければ大変ありがたいと思います。

よろしくお願いします。（拍手）

中村コーディネーター ありがとうございます。

ということで、もっとお伺いしたいところもあるんですが、予定の時間が来てしまっていて、皆さんの方も予定がおありでしょうけれども、我々の方もこの後の戻る予定などもあるものですから時間ということで終わらせていただきたいんですが、近藤委員長、今日こうやって参加していただいた皆さんに一言ございますか。

近藤委員長 お礼を申し上げます。

中村コーディネーター では、お礼を申し上げていただきたいと思います。

近藤委員長 この会の趣旨につきましては、木元座長からご説明申し上げたところですが、1時半から5時まで大変長い時間、多少いすもかたくておしりが痛くなりましたけれども、それにもかかわらず熱心にご発言をいただき、かつその問題点について、座長あるいは司会のリクエストに答えていただいたこと、まことにありがたいと思っています。

私どもの方が余ご当地に来ていないことから、私どもの顔を見るとひとこととか言いたいことがたくさんあるという皆様のお気持ちは非常に強く伝わってきて、その熱気を常に感じておりました。

ちょっと話は飛びますがけれども、先ほどご紹介のありました原子力政策大綱の案につきまして、8月にパブリックコメントを求めたわけですが、これについて、書面でご意見を

いただくだけではなく、直接皆様にお会いしてご意見いただくこともあるべしということで、ご意見を聴く会を全国５カ所で開催し、１２０名の方にご発言をいただきました。そうすると、やはり単にご発言内容ではなくて、その力の入れ方とか、表情からおっしゃりたいことの思いが伝わってきまして、その気持ちを我々しっかり受けとめなきゃならないなと思ったところでございますが、今日もそういう意味で非常に有益な時間を過ごせたと感じております。いただいたご指摘については、コアメンバー会議で整理をしていただいて、原子力委員会にご報告ご提案をいただくことになると思います。

委員会としては国民との相互理解、情報共有を非常に重要に考えています。木元先生は常に「広聴」と、広く聴くということを重要視し、それに基づいて何を伝えていくかということ原子力委員会あるいはつかさはつかさで真剣に考えるということを常におっしゃっておられますところ、これはまだ個人的な所見とお考えいただきたいのですが、そのあり方についても今日は非常に有益なご発言をたくさんいただいたというふうに思っております。

私どもは引き続き国民の皆様から負託されたことについて責任を果たしていきたいと思っておりますけれども、皆様におかれましても、引き続きご意見をお持ちになったら、原子力委員会にご意見という形でお寄せいただけると幸甚に存じます。

最後にコアメンバーの皆様と発言者の皆様には実りの多い会を開いていただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。（拍手）

中村コーディネーター　ということで、まだまだご発言なさりたい方もいらっしゃるかと思いますけれども、たくさんの皆さん、長い時間にわたって熱心に参加していただいて、本当にありがとうございました。皆様からお聞かせいただいたご意見、大事に持ち帰りたいと思っております。

我々市民参加懇談会のメンバーとしては、初めて静岡・御前崎で開催することができて、本当に今日はよかったなという印象を持って帰ることができます。

本当に皆さん長い時間、ありがとうございました。（拍手）

事務局　これもちまして、市民参加懇談会 in 御前崎を終わらせていただきます。

最後に事務局からお願いがございます。お配りした資料の中にアンケートがございます。ご記入いただき、お帰りの際に係の者にお渡しいただければ幸いと存じます。皆様のご意見により、市民参加懇談会をより充実したものにしていきたいと存じますので、よろしく

お願いいたします。

お出口は大変混み合いますので、お気をつけてお帰りください。

本日は大変ありがとうございました。